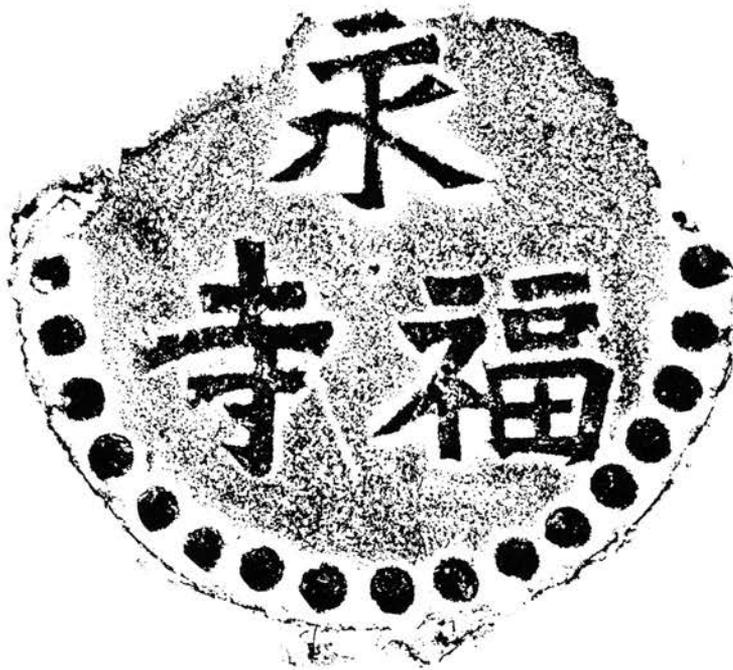


鎌倉市二階堂
国指定史跡

永福寺跡

国指定史跡永福寺跡環境整備
事業に係る発掘調査概要報告書
—昭和62年度—



昭和63年3月

鎌倉市教育委員会



翼廊全景(西より)



翼廊雨落ち溝(南辺)



翼廊全景(南西より)

序 文

鎌倉市教育委員会
教育長 尾崎 實

永福寺は建久3年(1192)に源頼朝が奥州平泉の諸堂を模して造ったと伝えられている寺院で、吾妻鏡などの記録に建立の様子や堂舎・苑池のありさまなどが書かれています。応永12年(1405)に焼失したあと廃寺になりましたが、周辺の環境とともに遺跡がよく保存されていました。このため、昭和42年に国指定史跡に指定されました。鎌倉市教育委員会では史跡永福寺跡整備委員会・文化庁・神奈川県教育庁文化財保護課の指導を得て、昭和58年から本格的な発掘調査を実施しています。この5年間のあいだに二階堂をはじめ、阿弥陀堂・薬師堂・複廊・南の翼廊の跡などが確認されました。特に、昨年度薬師堂跡が確認されたことにより、中心伽藍である三堂がそろって明らかになったところですが、今年度の発掘調査では北の翼廊跡が確認され、永福寺の中心伽藍の規模が明らかになりました。すなわち、二階堂を中心にその左右に両脇堂(阿弥陀堂・薬師堂)を配して複廊でつなぎ、さらにその外側に翼廊を配した建物群であり、その全長は130mにも及ぶ壮大なものです。また、建物の変遷も明らかになりました。すなわち、創建から廃絶まで基本的な伽藍配置が変わっていないこと、何度かの建て替えが行われていることなどです。とくに建て替えの跡をはっきりとした形で確認できたのは、今年度の調査が初めてです。苑池についても遣り水に続くと思われる溝が発見されています。こうした成果は、今後具体的な史跡整備をしていくにあたり、貴重な資料になると思います。

史跡の具体的整備については、解決しなければならない問題、検討しなければならない課題がたくさんあります。皆様のご協力を得て、今後共発掘調査を進め、早期に公開できるよう整備方針を検討していきたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。

例 言

1. 本書は国庫及び県費補助を受けて、昭和62年度に実施した神奈川県鎌倉市二階堂所在「国指定史跡永福寺跡」の環境整備事業に係る発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は鎌倉市教育委員会が実施し、史跡永福寺跡整備委員会・文化庁・神奈川県教育委員会文化財保護課の指導・助言を受けた。
3. 本書の執筆は、第1・2章、第3章(2)を福田が、第3章(1)を原が分担した。第4章は調査員の討議のもとに福田が文責を負った。
4. 本書に使用した写真のうち遺構の全景写真は木村が、個別の遺構写真は調査員が撮影した。遺物写真は木村が撮影した。
5. 発掘調査の体制
調査主体 鎌倉市教育委員会
主任調査員 福田 誠
調査員 原 廣志、木村美代治
調査補助員 佐藤 泉、新国哲也、及川加代子

本文目次

第1章 調査の経過	1
第2章 検出された遺構	
1 層序及び概要	2
2 翼廊	2
3 中門	5
4 橋	5
5 溝・柵状遺構	6
6 升状遺構	6
第3章 出土した遺物	
1 瓦類	7
2 瓦以外の遺物	21
第4章 まとめ	31

挿図目次

遺構

図1 調査地点位置図	1
図2 遺構面地形測量図	3
図3 翼廊配置模式図	4
図4 翼廊南北列遺構図（折込み）	
図5 中門周辺Ⅰ・Ⅱ期遺構図（折込み）	
図6 1～3溝、柵状遺構、升状遺構図（折込み）	
図7 鏡瓦-1	8
図8 宇瓦-1	9
図9 鏡瓦-2	10
図10 宇瓦-2	10
図11 男瓦	11
図12 女瓦-1	12
図13 女瓦-2	13
図14 女瓦-3	14
図15 女瓦-4	15
図16 鬼瓦	16
図17 東海窯系産瓦-1	17

図18	東海窯系産瓦－2	18
図19	東海窯系産瓦－3	19
図20	東海窯系産瓦－4	20
図21	3溝出土遺物	21
図22	3溝上面出土遺物	22
図23	升状遺構・2溝出土遺物	23
図24	1溝出土遺物	24
図25	北辺雨落ち溝上層出土遺物	25
図26	かわらけ溜り出土遺物	26
図27	地山面出土遺物	27
図28	遺構面出土遺物	28
図29	包含層出土五輪塔	29
図30	翼廊柱変遷模式図	30
図31	中門柱変遷模式図	31
図32	今年度までに確認した建物跡	32
表	翼廊礎石柱座レベル表	5

付図 62年度調査区全測図

図 版 目 次

図版1	調査区全景	図版15	1溝・升状遺構
図版2	調査区全景	図版16	柵状遺構
図版3	雨落ち溝	図版17	鎧瓦
図版4	翼廊南北列礎石状況	図版18	宇瓦
図版5	翼廊東西列礎石状況	図版19	鎧瓦・宇瓦
図版6	Ⅲ期礎石柱座・Ⅱ期掘立柱柱根状況	図版20	男瓦・女瓦
図版7	Ⅲ期根石・Ⅱ期柱根・Ⅰ期根石状況	図版21	女瓦
図版8	中門・中門Ⅱ期掘立柱状況	図版22	文字瓦
図版9	中門棟柱Ⅲ期礎石・根石状況	図版23	鬼瓦・東海窯系産瓦
図版10	中門棟柱Ⅱ期礎板検出状況	図版24	東海窯系産瓦
図版11	中門棟柱Ⅰ期掘立柱柱根検出状況	図版25	遺構出土かわらけ
図版12	中門・橋状遺構	図版26	遺構・遺構面出土かわらけ
図版13	4溝・砂利面検出状況	図版27	その他の遺物
図版14	2溝・3溝		

第1章 調査の経過

今年度の調査区は、整備委員会の指示に基づき、昨年度調査区(薬師堂跡)の北側に設定した。薬師堂の調査結果から、60年度に確認している右翼廊と対をなす左翼廊が確認できるものと予想された。

調査区は、薬師堂の北側に取り付くと思われる翼廊の確認と遣り水の検出に主眼をおいて設定した。B・C-2～4区に跨る。この場所は昨年度調査区の北隣りに当り、取り付く薬師堂との関係も明らかになるものと思われた。

現地調査は昭和62年10月30日に開始して、約603m²を発掘し、翌63年2月1日までに完了し調査を終えた。

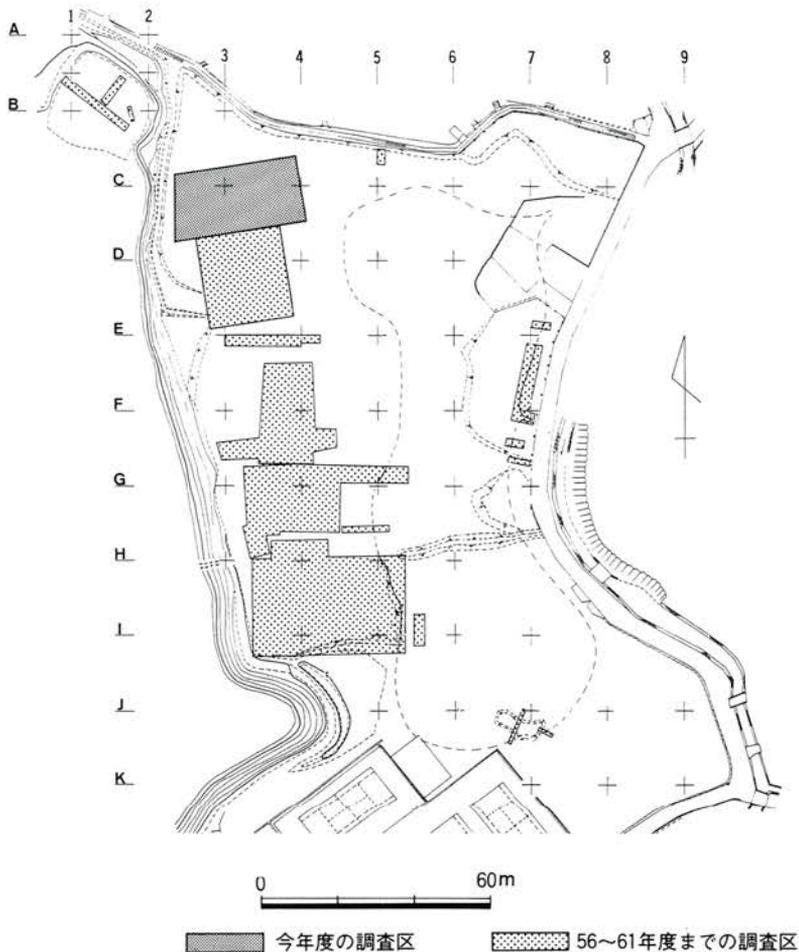


図1 調査地点位置図

第2章 検出された遺構

1. 層序及び概要

今年度の調査地点の遺構埋没深度は、現地表面から遺構検出面まで、調査区の西側で約150cm、東側で約120cmの厚さで土砂が堆積している。地表面から深さ約60cmの所に、宝永年間に爆発した富士山の火山灰が観察された。

遺構面上には、約40cmの厚さで西ヶ谷からの流水による青灰色の砂、砂泥、砂利が入り組んで堆積している。このことから永福寺は応永12年に焼失した後、荒れた状態で放置され、急速に流水による砂、泥、砂利によって埋もれて行ったと推察できる。検出した遺構面の標高は約19.2～19.5mである。翼廊の周辺では、19.4～19.55mと高まっている。

遺構検出面は基本的に黒色土の地山である。創建当初地山を使用していたが、何度かの建て替えの時、部分的に土を盛り上げて修復している所が観察できた。

2. 翼廊

薬師堂から北に延び途中からかぎの手に東へ折れて池に向かっている翼廊を、1間幅で南北方向に5間、東西方向に7間検出した。8間目で柱間が広くなることからここが中門になるものと思われる。翼廊はさらに今年度の調査区を越えて東に向かって伸びている。

礎石

建物を支えていた安山岩質の礎石を24個検出した。薬師堂から北に延びる南北列の礎石大きさは径70～100cmと大きく、東に延びる東西列の礎石の大きさは径40～60cmと一回り小型である。そのほとんどの礎石は、原位置を留めていた。その中でも礎石1・2・4・8・11・16・18の表面に火災の熱を直接受けた所と柱の下になっていた所の差で印影ができ、柱の形に丸く観察できた。観察できた柱の直径は27～30cmである。礎石9・11・12では、大きな礎石の上に小型の礎石が据えられていた。また東西列の礎石（13～28）の下には、瓦が根石がわりに使われていた。

束石

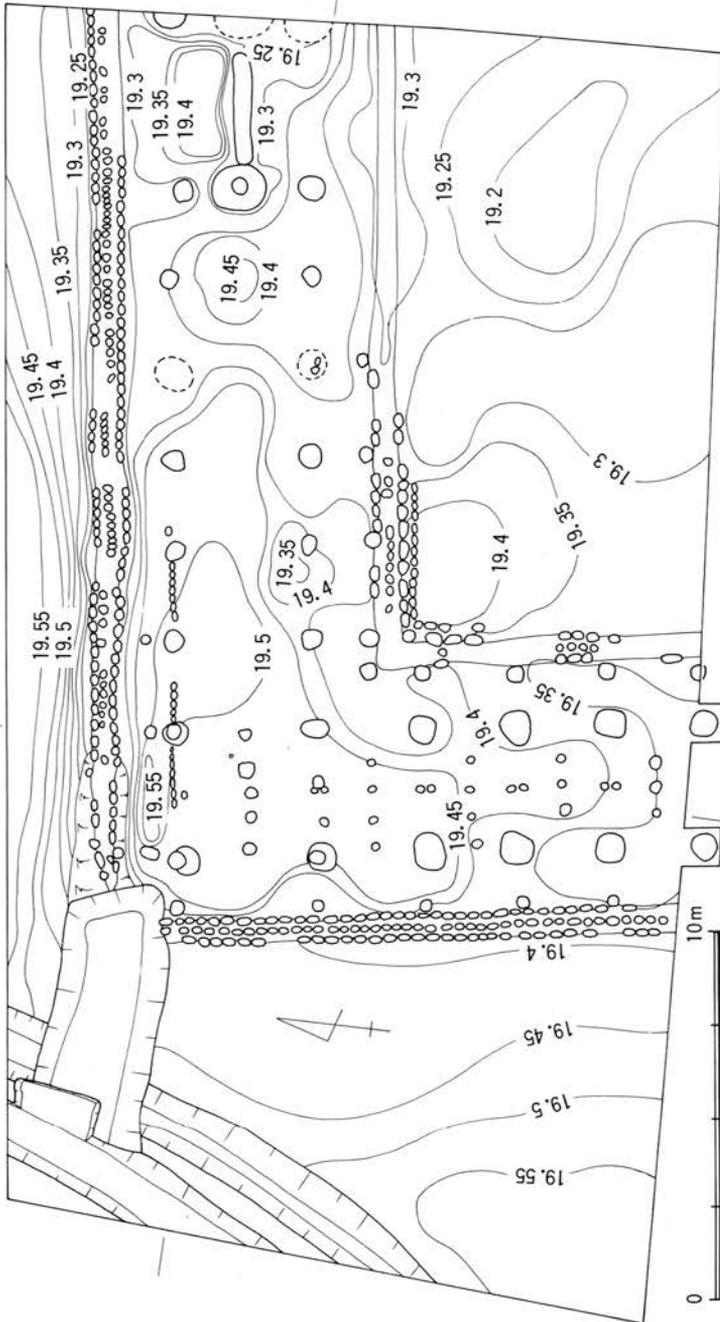
建物を支えていた礎石の間に径30cm程の安山岩質の玉石が規則正しく並んでいる。1間幅の廊の中央を通るように2個一組みにしたもの、1間を4間割りにしているものが交互に並んでいる。

礎石の間に規則正しく据えられていることから、建物の床を支えていた束柱が乗る束石と思われる。これによって翼廊は床貼りであったことがわかった。

縁束

建物を支える礎石の外側に40cm程の大きさの礎石を検出した。（縁1～17）

礎石は浅く掘り窪めた地面に割れた瓦を根石がわりに使って据えられていた。瓦を根石がわりに使うことは、本体の大きな礎石（東西列）にも見られる共通の工法である。翼廊の南北の柱列から縁束までの距離は東側で1500mm、西側で1300mmである。翼廊の東西の柱列から南側で1500mm、北側で約700mmである。



単位はm

図2 遺構面地形測量図

雨落ち溝

かぎの手に曲がる翼廊の両側に並行する溝を検出した。この溝は地山を掘り窪めて、30～50cm大の安山岩を3列に並べ、中央の石列を一段低く据えて形を作っている。溝は地山を掘り窪めて石を据えている。石列の乱れや、石材などから何度となく改修されていると思われる。翼廊から溝までの距離は南北列の東側で2000mm、西側で1800mm、東西列の柱通りから南側で2000mm、北側で1800mmである。

礎石下の柱根及び根石

翼廊東西列の礎石（13～28）の真下に、掘立柱の柱根が遺存していることをボーリング調査で確認したために、東西廊の梁行幅と桁行1間幅の寸法を確認する目的で、礎石17・18・19・20の礎石と根石を動かして掘立柱の柱根及び掘方を確認した。17・18の柱根の下には礎板が入れられて

いた。18の柱根は黒く炭化しており、火災で焼けたものと思われる。

掘立柱の掘方壁に30cm大の玉石が観察された。上部に礎石のない19・20を立ち割り、掘方壁で観察した玉石は、掘立柱以前の礎石の根石であることを確認した。

立ち割りの調査終了後動かした礎石及び根石は現況に復帰した。

翼廊の規模

遺構面で検出した礎石から、翼廊は梁行1間で南北の桁行き5間、東西の桁行8間以上の建物であり、このことから60年度に検出確認した右翼廊と、今年度検出した左翼廊は同じ柱間を持っていたことを確認した。大多数の礎石が原位置を留めていたことと礎石上面に残る柱の痕跡、礎石の下に遺存していた掘立柱柱根から柱間の寸法を复原した。

礎石1と2の上面に残る柱の痕跡の芯心距離は3330mmである。この数値は翼廊が取り付く薬師堂の基壇東柱の柱間距離に等しい。礎石1と11に残る柱の痕跡から測ると南北方向の桁行寸法は、13766mmである。5間に分かれる桁行の寸法は、南から3間までが2440mm、4間目が2746mmである。5間目の寸法は3700mmで、この寸法は東西列の梁行寸法になる。

東西列の梁行は3700mmである。東西方向の桁行寸法は礎石に残る柱の痕跡と、遺存する掘立柱の柱根間の寸法から22450mmである。さらに調査区を越えて東に延びている。今回検出したのは、中門を含む8間分である。西から1間目の寸法は南北列の梁行と同じ3330mmである。2間目から7間目までの寸法は2440mmである。8間目は中門になるため、4480mmと広がる。

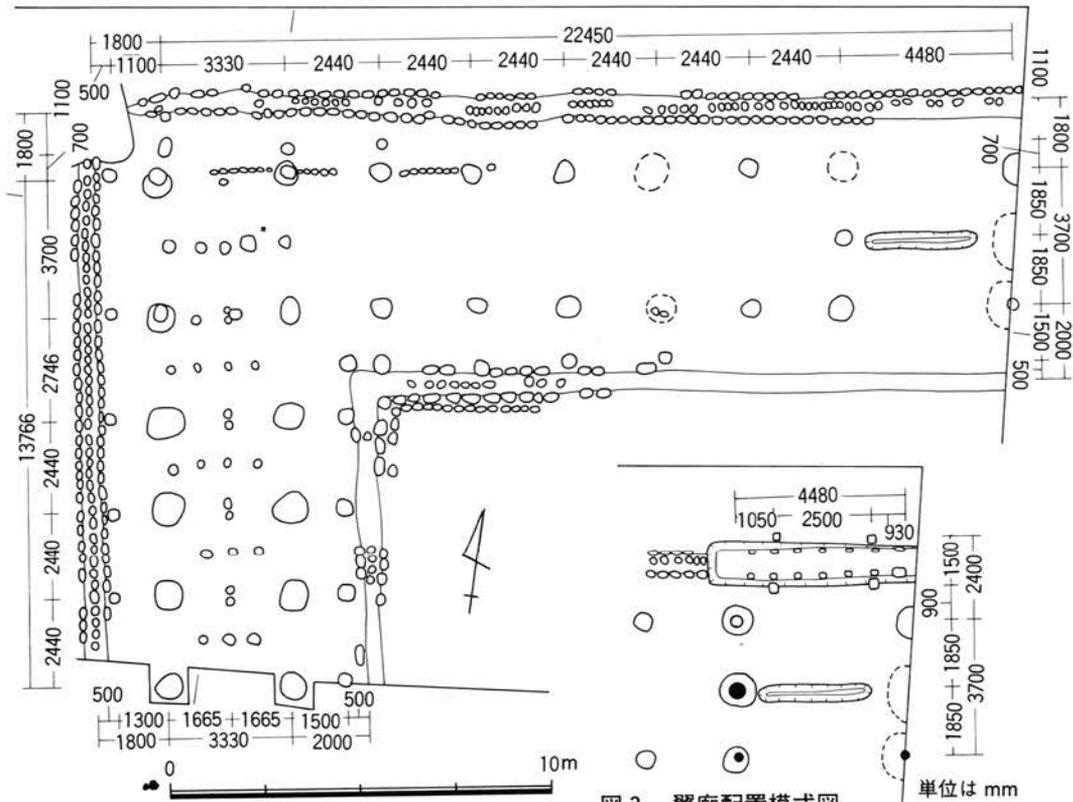


図3 翼廊配置模式図

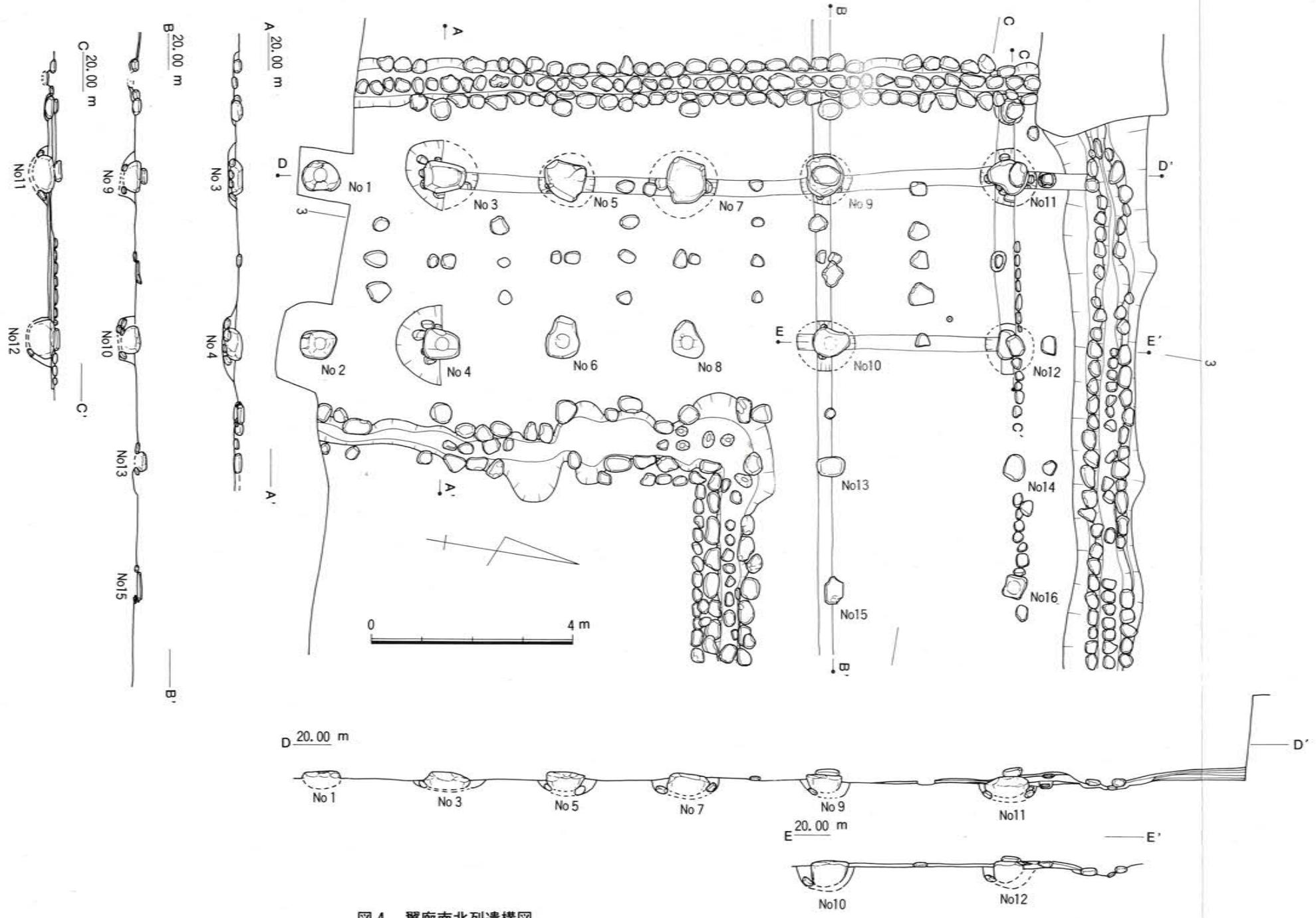


图4 翼廊南北列遺構図

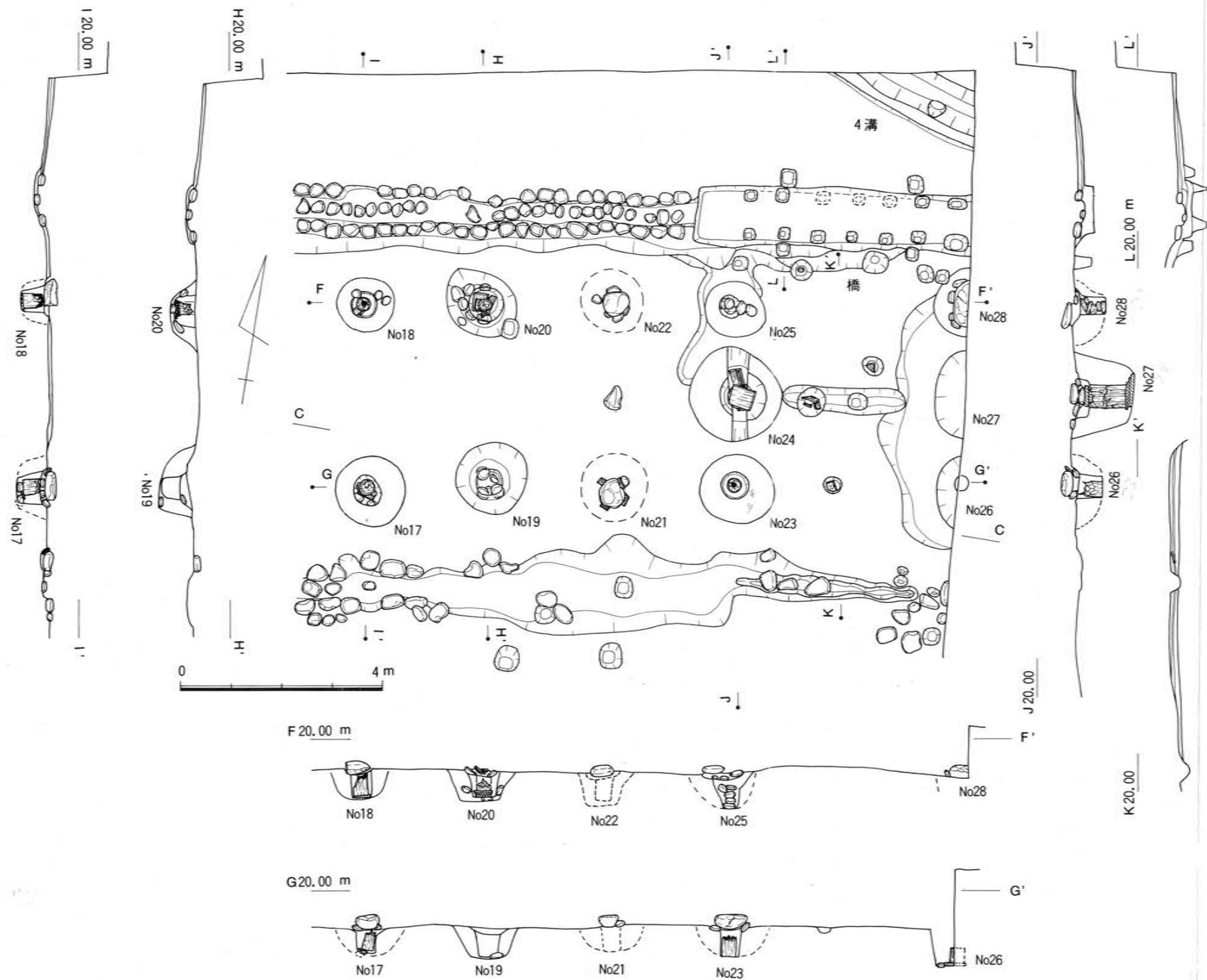
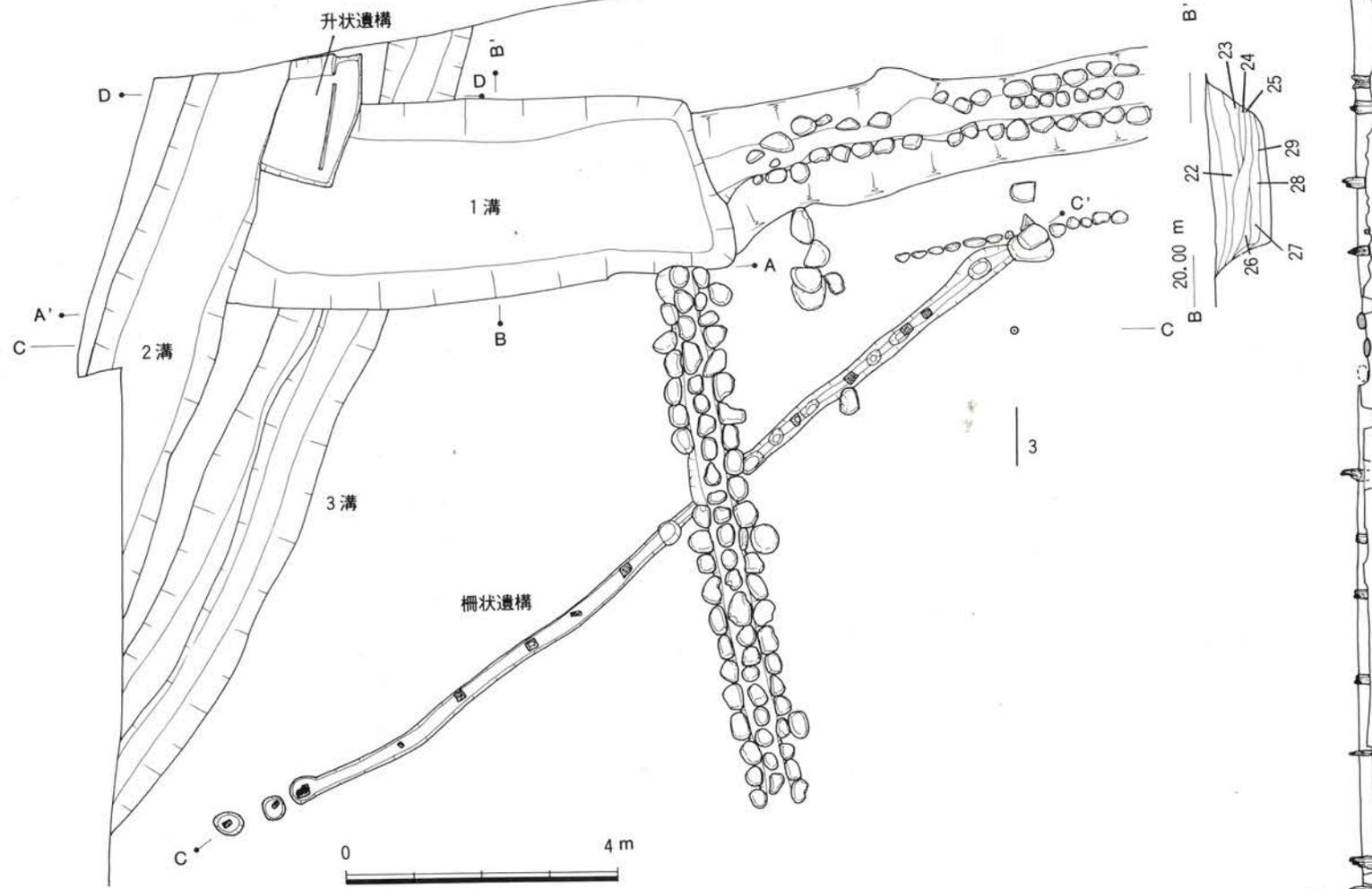
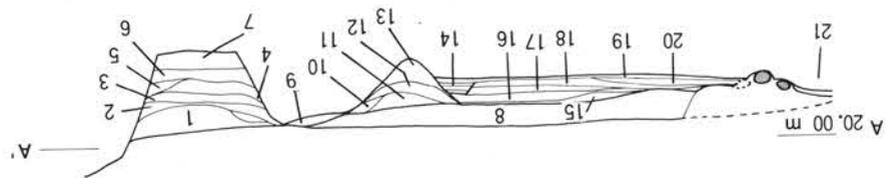


図5 中門周辺 I・II期遺構図



1. 暗黒灰色砂質土
2. 暗茶褐色粘質土
3. 暗黒灰色砂質土(3cm大の土丹多量)
4. 暗黒灰色砂質土(砂、木片多量)
5. 暗黒灰色泥砂
6. 暗黒灰色砂質土(拳大の土丹含む)
7. 暗黒灰色砂質土(砂利多量)
8. 土丹層
9. 土丹層(砂と砂利を含む)
10. 暗青灰色砂泥(細かい土丹含む)
11. 青灰色粘質土(3溝上層)
12. 黒灰色砂質土(3溝中層)
13. 黒色土(3溝下層)
14. 黒色粘質土と細かい土丹の版築
15. 青灰色砂質土(貝ガラを含み、上面に砂利)
16. 黒色土
17. 暗黒色土
18. 黒色土
19. 青灰色粘質土
20. 黒色土(細かい貝ガラ含む)
21. 青灰色砂質土
22. 暗灰色粘質土
23. 暗黒灰色粘質土
24. 暗灰褐色粘質土
25. 暗灰黒色粘質土
26. 暗黒灰色砂質土
27. 暗灰色砂質土
28. 暗灰黒色粘質土(木片多量)
29. 暗灰褐色粘質土(粘性強い)

図6 1~3溝・升状遺構・柵状遺構図

礎石No	柱座レベル	礎石No	柱座レベル	礎石No	柱座レベル	礎石No	柱座レベル
1	19.475m	9	19.445m	14	19.451m	22	19.469m
2	19.488m	9'	19.549m	15	19.409m	23	19.503m
3	19.463m	10	19.469m	16	19.497m	24	19.303m
4	19.478m	11	19.443m	17	19.482m	25	19.469m
5	19.469m	11'	19.572m	18	19.498m	26	————
6	19.469m	12	19.419m	19	————	27	————
7	19.443m	12'	19.544m	20	————	28	19.478m
8	19.472m	13	19.493m	21	19.465m	—	————

表 翼廊礎石柱座レベル表

3. 中門

翼廊東西列の西から8間目にあたる。他の柱間の約2倍の柱間を持ち、梁行も中間に礎石を置いて1間を2間割りとしている。礎石23～28がこれにあたる。梁行の寸法は、翼廊の梁行と同じ3700mmで、これを2間割りにしている。桁行は4480mmである。中央にあたる礎石24と27の間には地覆の抜き跡と思われる長細い溝がある。

翼廊の東西列の礎石と同じく礎石23・26では掘立柱柱根、25・27では抜き跡を確認した。中央の礎石24の根石の下に方形で1辺が約40cm、厚さ6cmの礎板とさらにこの下に直径約45cm、残存する高さ70cmの掘立柱柱根を確認した。柱根の周囲は幅約5cmの檜皮と思われる樹皮を縦方向に貼り付け、これを同じ樹皮を横に帯状に巻いてとめていた。

このように掘立柱の根元に樹皮を巻く工法は、翼廊の掘立柱（礎石20下）でも観察できた。二階堂、阿弥陀堂、薬師堂などの木製基壇束柱でも、同じ工法が用いられていた。

4. 橋

北辺雨落ち溝の中門正面で検出した遺構である。雨落ち溝が中門部分で、幅120cm、長さ550cm以上、深さ約30cmと箱状に深くなる。溝の底面に約70cm間隔で左右対になるように計14穴の柱穴を検出した。溝が箱状に深くなることから、この柱穴には土留めの板を押さえる柱が立つものと思われる。この溝を挟むように4穴の柱穴を検出した。幅1500mm、長さ2500mmの柱間を持ち中門の正面で雨落ち溝を挟んでいることから、溝に掛かる橋の橋脚になるとと思われる。

中門の南にあたる南辺の雨落ち溝では、橋状の遺構は検出されなかった。また橋状の遺構は、北辺の雨落ち溝の下から検出されたので、玉石を使った雨落ち溝部分と橋状遺構に時期差が認められる。

5. 溝・柵状遺構

今年度の調査区内で、4本の溝状遺構と1本の柵状遺構を検出した。

1 溝

翼廊の雨落ち溝西辺と北辺のコーナー部分を壊して造られた水溜めで、幅3m、長さ7m、深さ70cmである。雨落ち溝を壊していることから、翼廊より後の時期のものと思われる。この水溜めは北辺の雨落ち溝をそのまま水路として使用していた。

2 溝

調査区の北西隅で検出した溝で、幅150cm、深さ140cmの断面方形に岩盤を掘り窪めた溝である。山際の排水と池へ水を引きまわす遣り水の導水路とも考えられる。1溝に切られていることから、1溝より古くなると思われる。

3 溝

2溝に平行して検出した溝である。幅150cm、深さ60cmの断面V字形に岩盤と地山を掘り窪めた溝である。2溝と平行していること、出土している遺物が2溝より古いことから、2溝に先行する山際の排水と池に水を引きまわす遣り水の導水路とも考えられる。2溝・3溝とも検出した範囲が狭いため委細は不明である。

4 溝

調査区の北東隅で検出した溝である。幅80cm、深さ50cmの断面V字形の溝である。溝底に木片が多かったことや、含土が同じことから3溝と同じ時期の溝と思われる。背後の西ヶ谷の水を池に引き込むための溝と思われるが、検出した範囲が狭いため委細は不明である。

柵状遺構

1溝の南約5mのところ翼廊を切る形で幅25cm、深さ20cm、長さ15mにわたって掘られた布掘りの掘方と、中に遺存する11本の掘立柱柱根を検出した。使われている柱の規格は不揃いでまた間隔もそろっていないことから、建物とは考えにくく柵状のものと考えられる。これらの柱根は先端が黒く炭化しており、火災により焼失したものと推測される。またこの柵状を堺に1溝まで土丹により土盛りが30cmの厚さで行なわれていることから、柵状遺構は1溝にとまなう土盛りの土留め柵と思われる。

6. 升状遺構

調査区の北西隅、2溝と3溝の間で検出した遺構である。1辺約2mの方形になると思われるが、西半分は2溝に切られてしまっている。遺構の切りあいから、3溝よりも新しく2溝より古いと思われるが、性格など委細は不明である。

第3章 出土した遺物

今年度の発掘調査によって出土した遺物は主として瓦類であるが、遺構ごとにまとまった形でかわらけが出土している。その他に舶載・国産陶磁器、金属製品、石製品が出土している。

1. 瓦類

今年度の発掘調査で出土した瓦類は、鎧瓦・宇瓦・男瓦・女瓦・鬼瓦・文字瓦などである。しかしながら、これらの瓦類は遺構面を覆う灰色粘土層中からの発見が多く、年代のわかる遺構との関連、あるいは出土層位などによって確実な年代または前後関係を知り得る資料はごく少なかった。これらの中であって、翼廊東西列及び3溝に伴って出土した瓦類は、永福寺の変遷の様子を知る上で極めて大きな意義があると言えよう。

翼廊東西列では、礎石の下から瓦が出土した。この瓦はその出土状態から察して永福寺の主要堂宇に葺かれていたものが修理や再建等の後に廃棄され、これをもって翼廊の礎石下部に根石と同様の状態で敷き込んだ二次的な使用であることは疑いない。この翼廊の東西列の伴って出土した瓦類はその形態や技法から見て、創建期（Ⅰ期）まで遡る女瓦A類・F類（東海窯系産）と寛元・宝治年間（Ⅱ期）の修理に際して用いられたと考えられる女瓦C類・D類（埼玉水殿瓦窯）の2時期の瓦を含んでいた。さらに昭和60年度調査の釣殿周辺等からまとめて出土した、女瓦E類を始めとする永福寺出土瓦Ⅲ期に位置付けられるもっとも新しい時期の瓦類を全く含んでいないことは、瓦を根石の代用とした時期の年代的位置を決める上で重要な手掛りにならう。すなわち、翼廊東西列の礎石下から出土した瓦類は、永福寺出土軒先瓦の文様変遷による対応関係から考えてⅠ・Ⅱ期に位置付けられる創建期～寛元・宝治年間の時期の製品であり、Ⅲ期の弘安年間以降再建の瓦類を含んでいない。また翼廊東西列の遺構面上でかわらけ溜りを形成していたかわらけの年代は14世紀中頃であり、翼廊の廃絶の下限年代はこれ以前と考えられる。従って、Ⅲ期翼廊東西列は弘安年間以降、14世紀中頃までの年代観が与えられる。『北条九代記』によると、弘安3年焼失・同10年再建と延慶3年焼失の記事があり、Ⅲ期の翼廊東西列はこのいずれかの時期のものであろう。

今年度の発掘調査で出土した軒先瓦は、昨年度までに確認された型式のものとして、鎧瓦（YA I 01・02、Ⅱ01・02 a b・03・05）と宇瓦（YN I 01、Ⅱ01・03・05・11）である。宇瓦のYN I 03（唐草文系）とYN Ⅲ03（寺銘系）としたものは今年度新しく検出された型式である。このうち遺構に伴って出土した軒先瓦は、3溝下層からYA I 01とYN I 01、同溝中層からはYA Ⅱ01が出土した。YA Ⅱ01は鶴ヶ岡八幡宮の調査では中世最下層の遺構面上に伴って出土している型式のものである。3溝中・下層は同層出土かわらけの年代観と考え合わせて永福寺創建期まで遡れる溝であることは確かであろう。

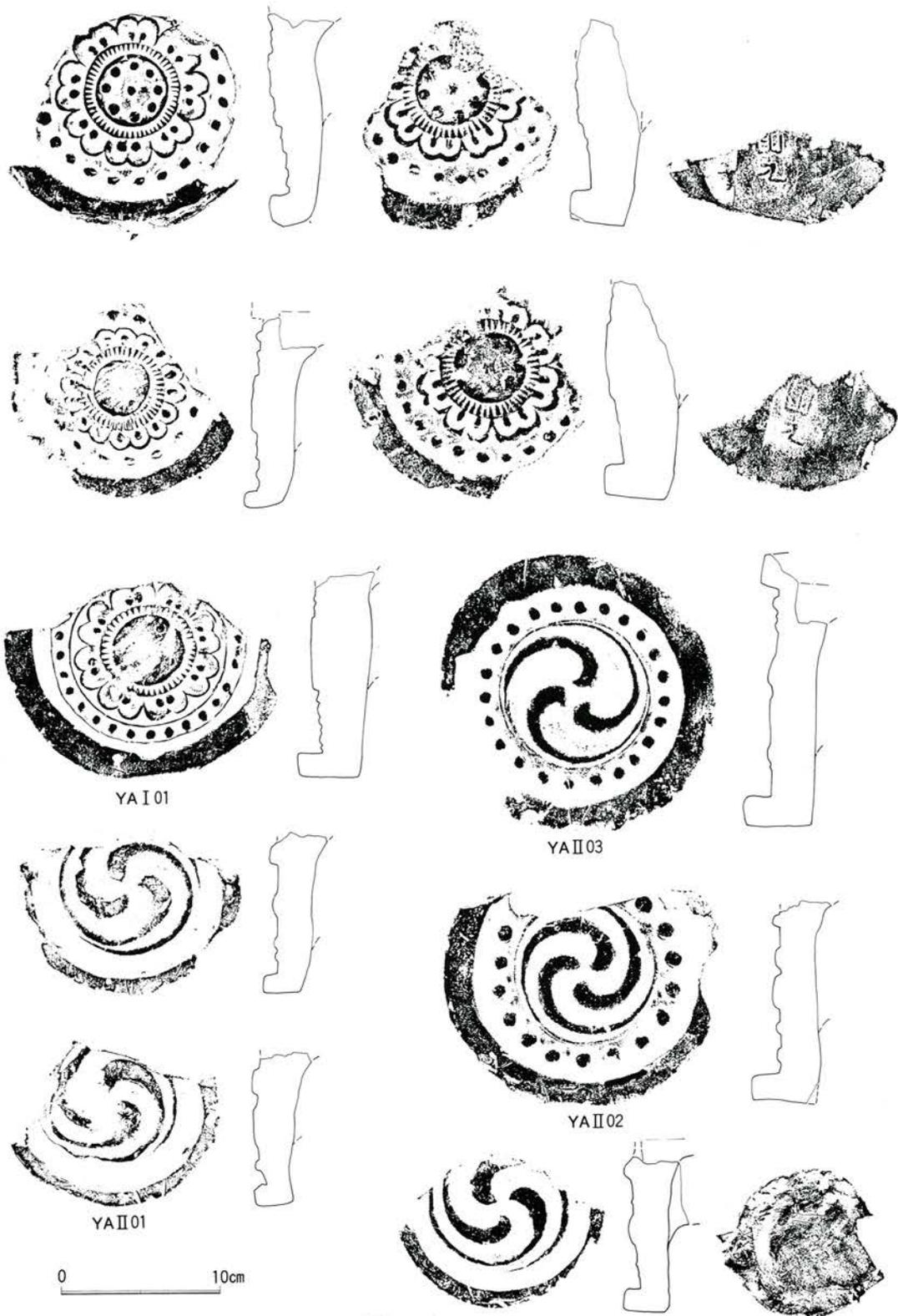


图7 鐘瓦-1

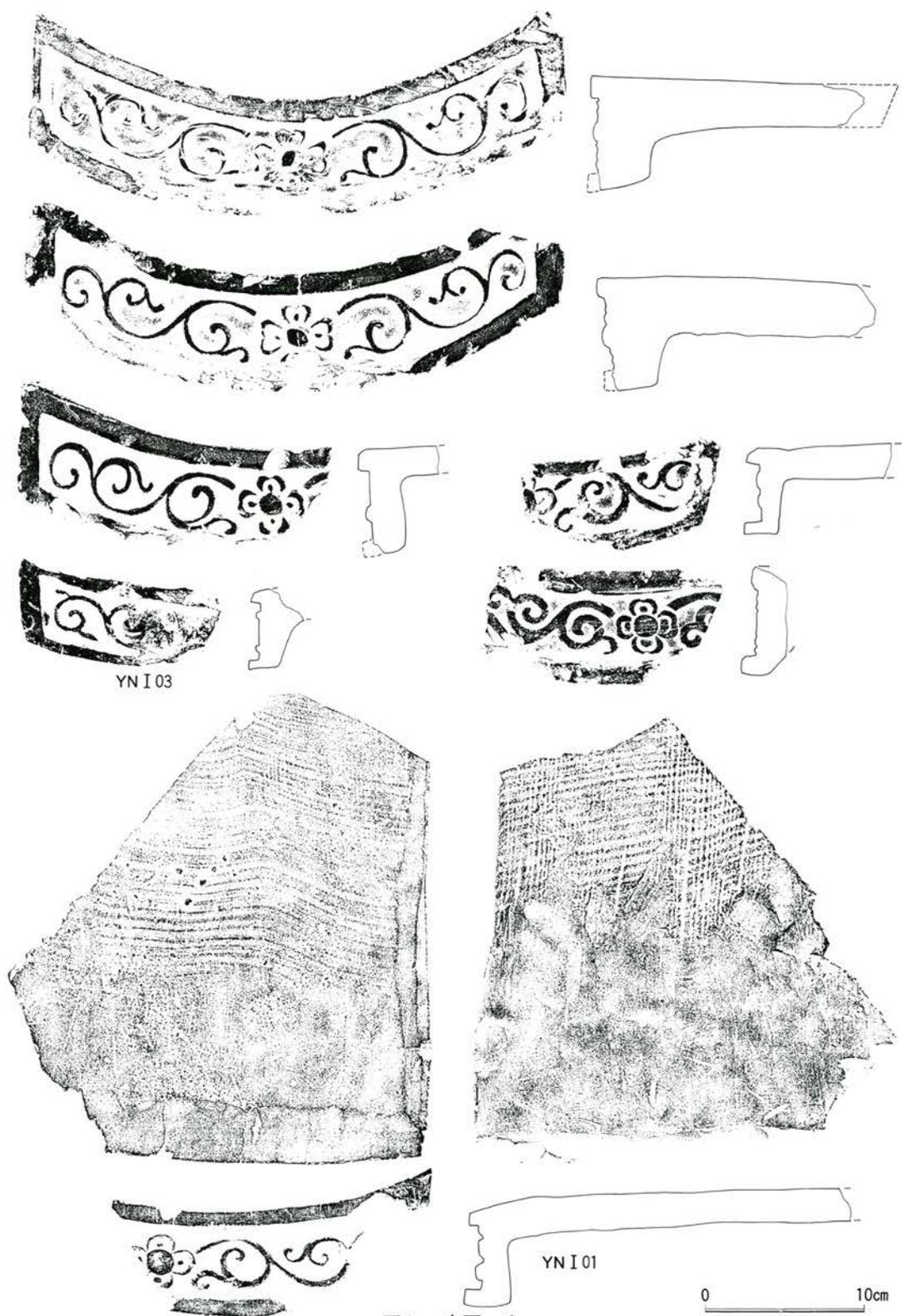


图8 宇瓦-1

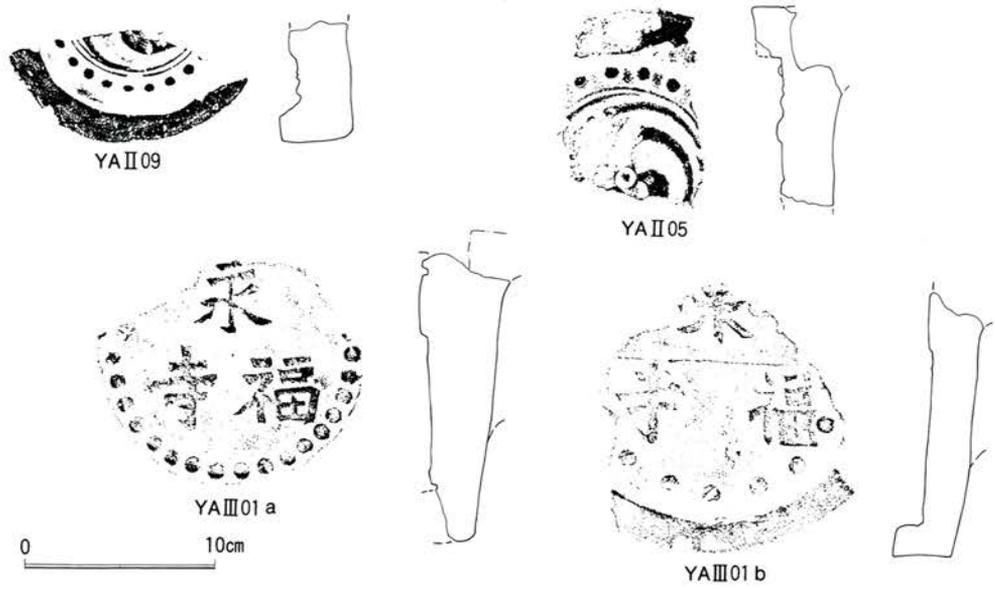


图9 鎧瓦-2

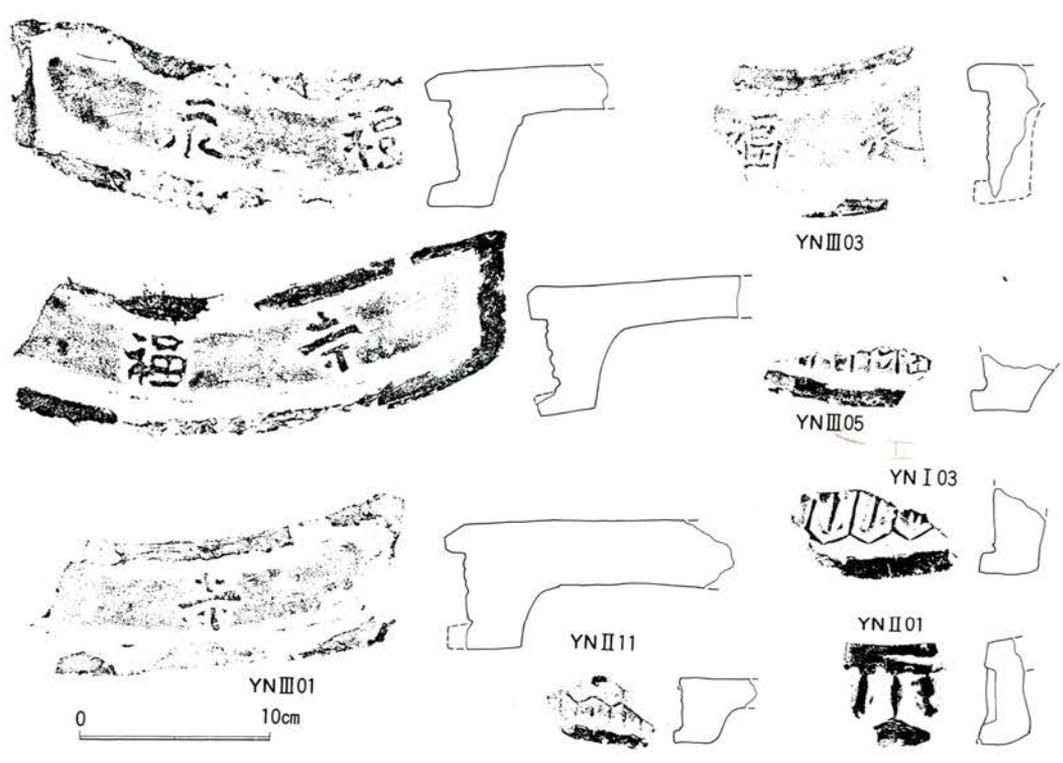
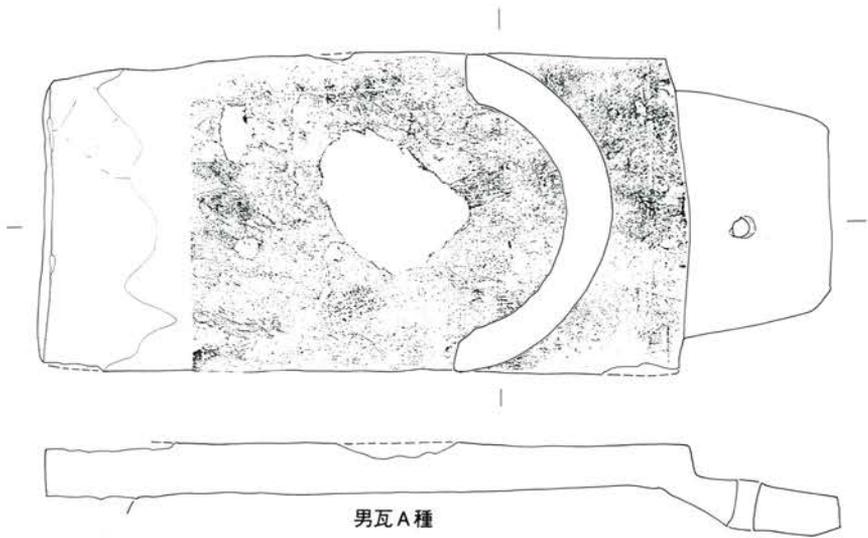
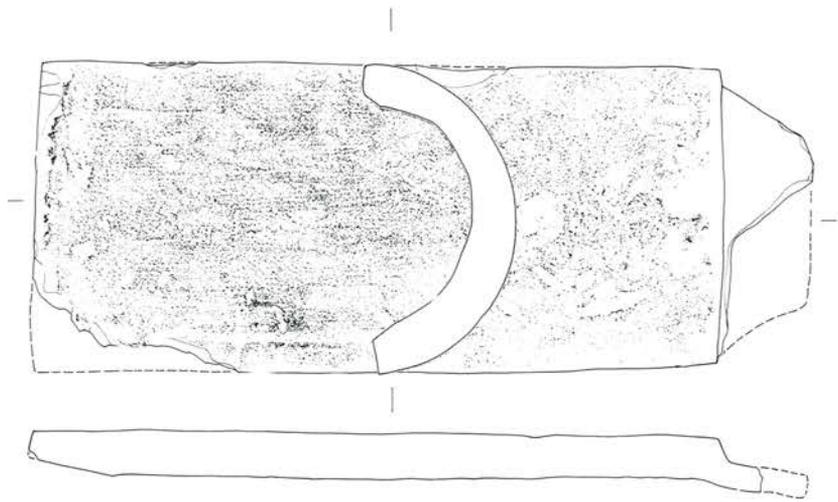
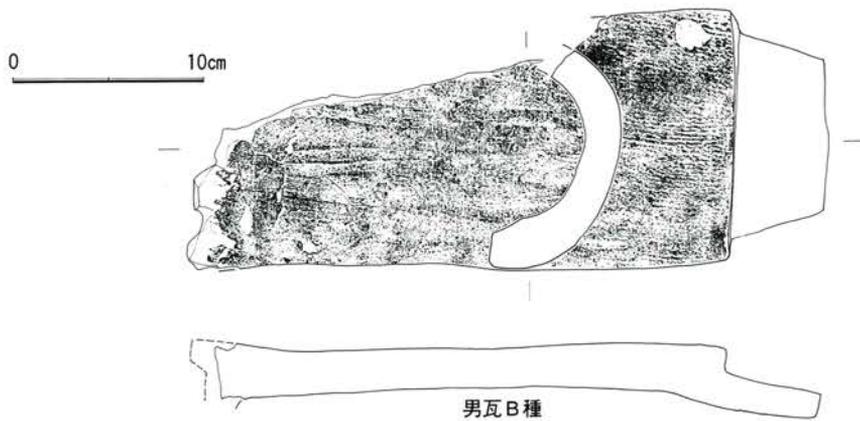


图10 宇瓦-2



男瓦A種



男瓦B種
 図11 男瓦

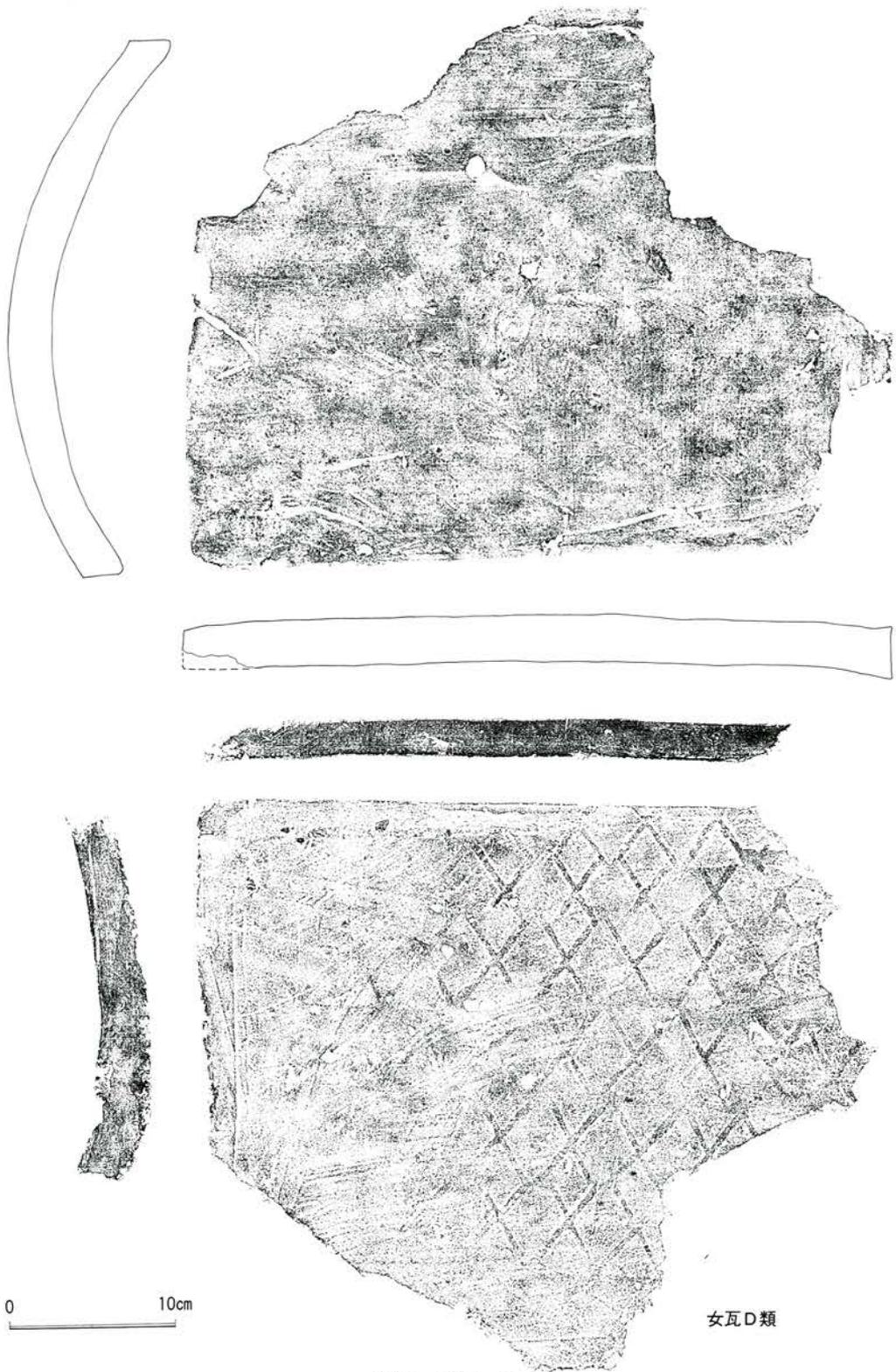
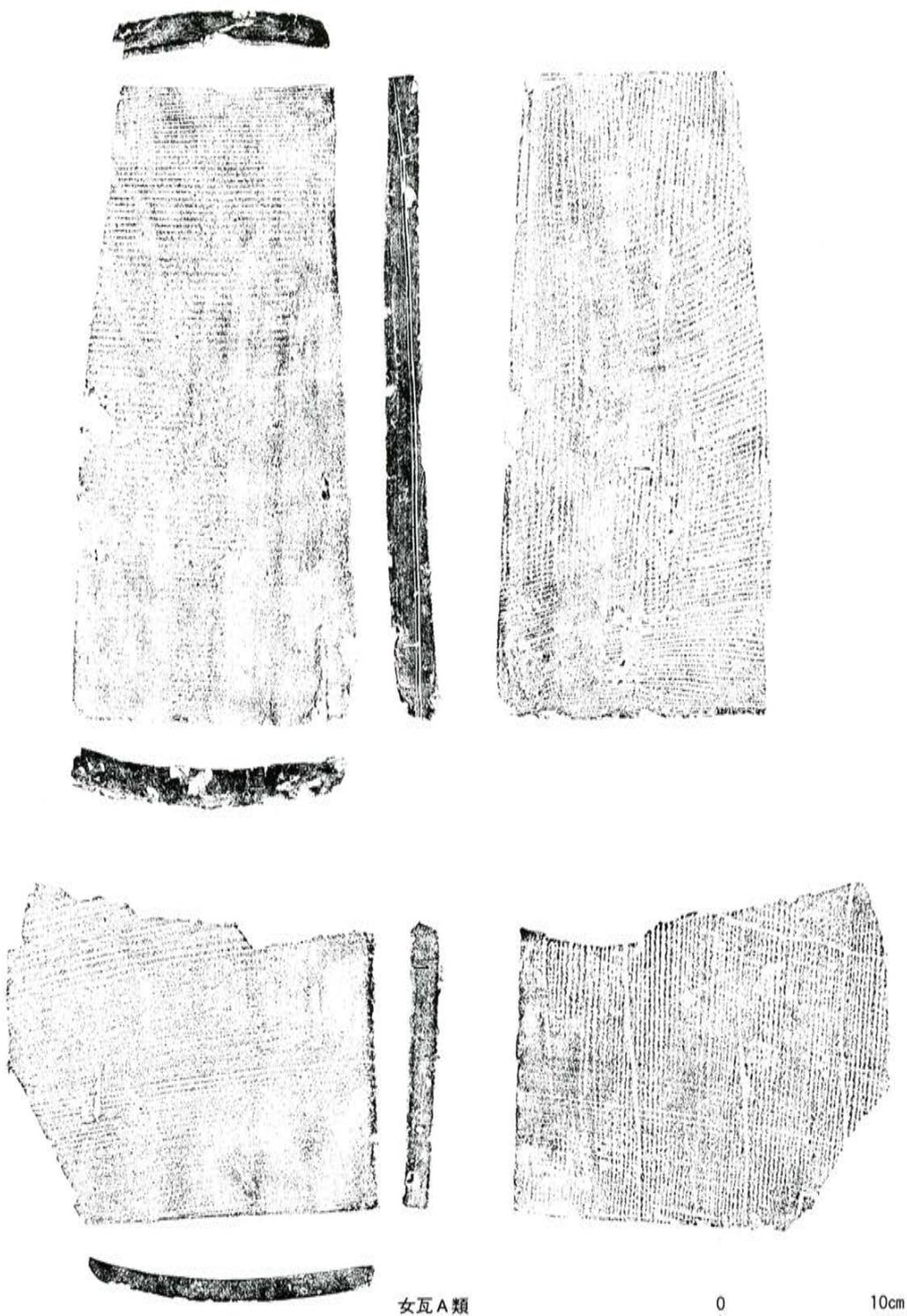


图12 女瓦-1

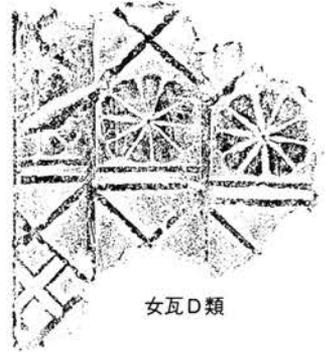
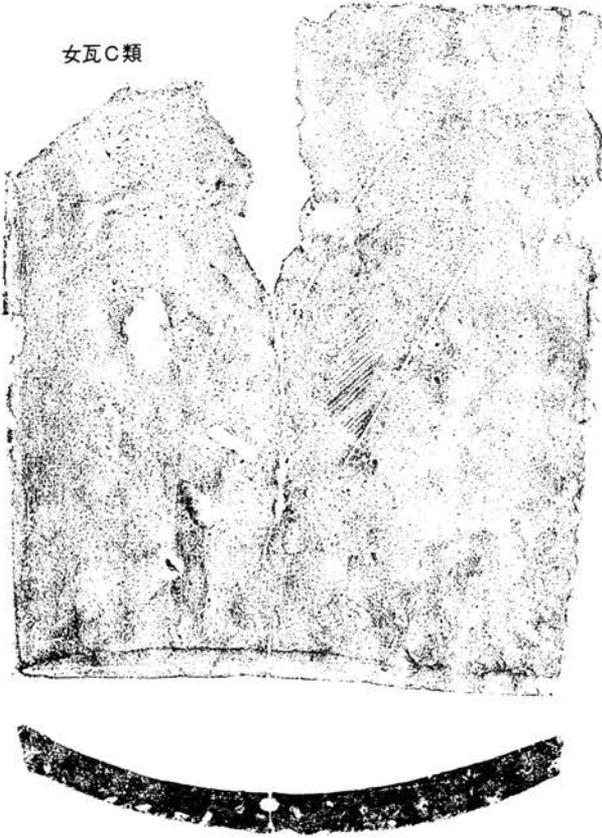


女瓦A類

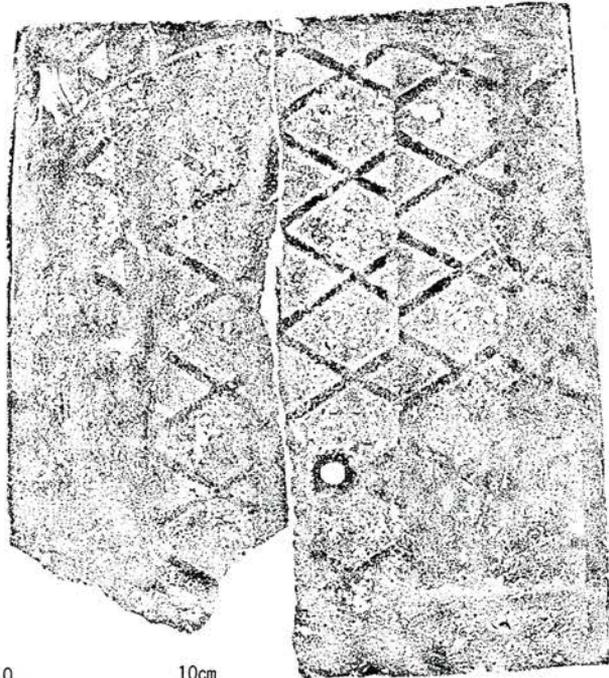
0 10cm

图13 女瓦-2

女瓦C類



女瓦D類



0 10cm

图14 女瓦-3

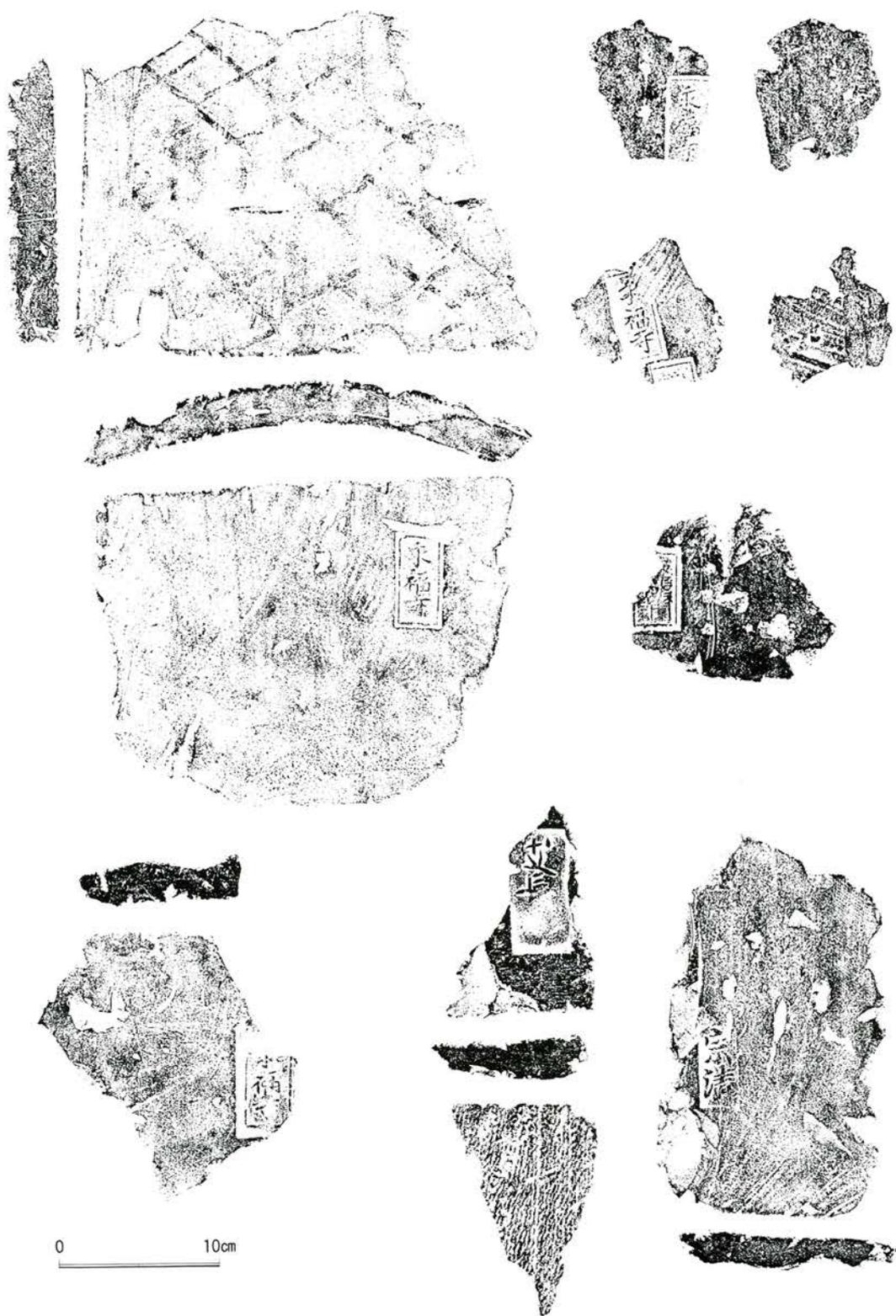


图15 女瓦-4

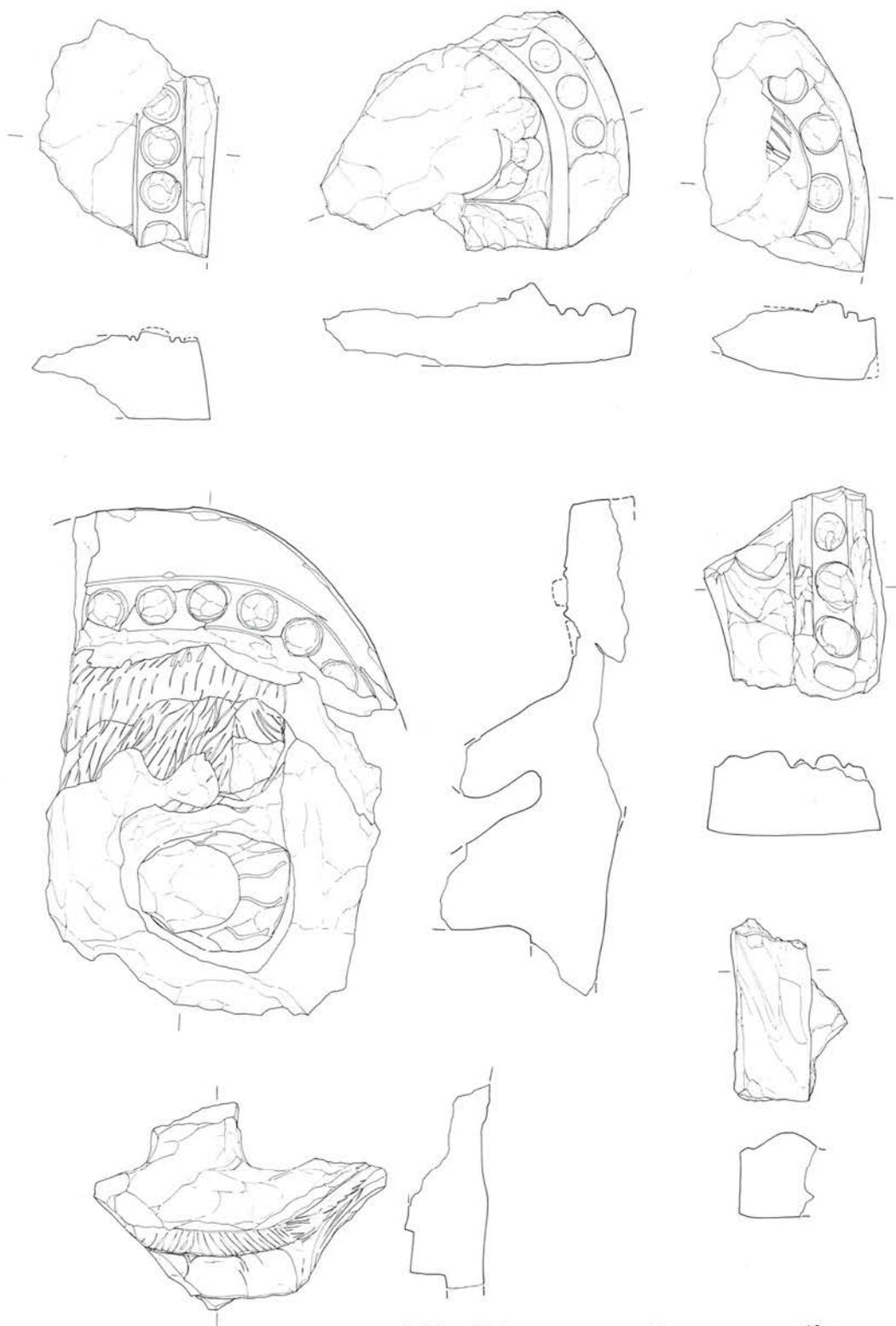


图16 鬼瓦

0 10cm

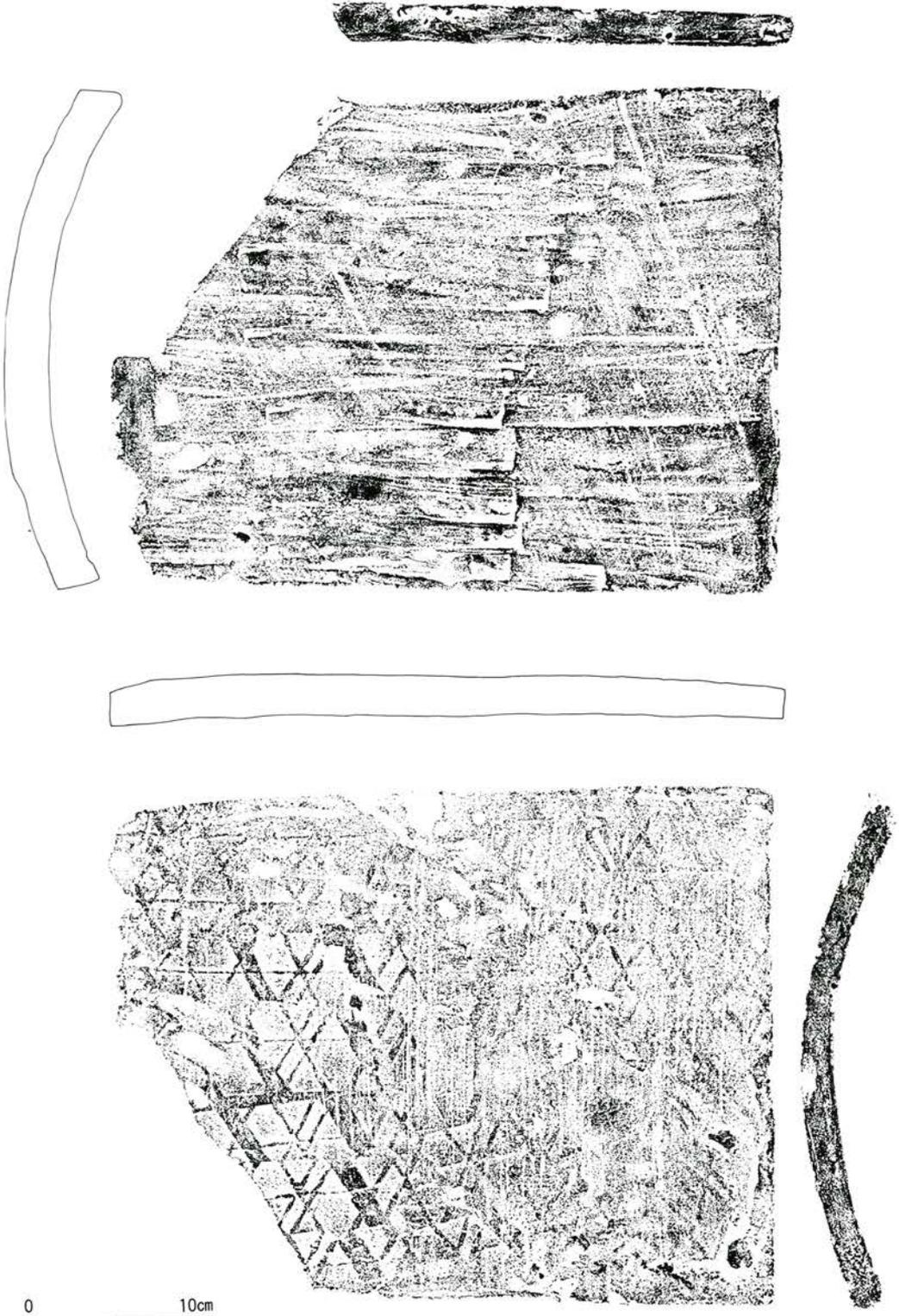
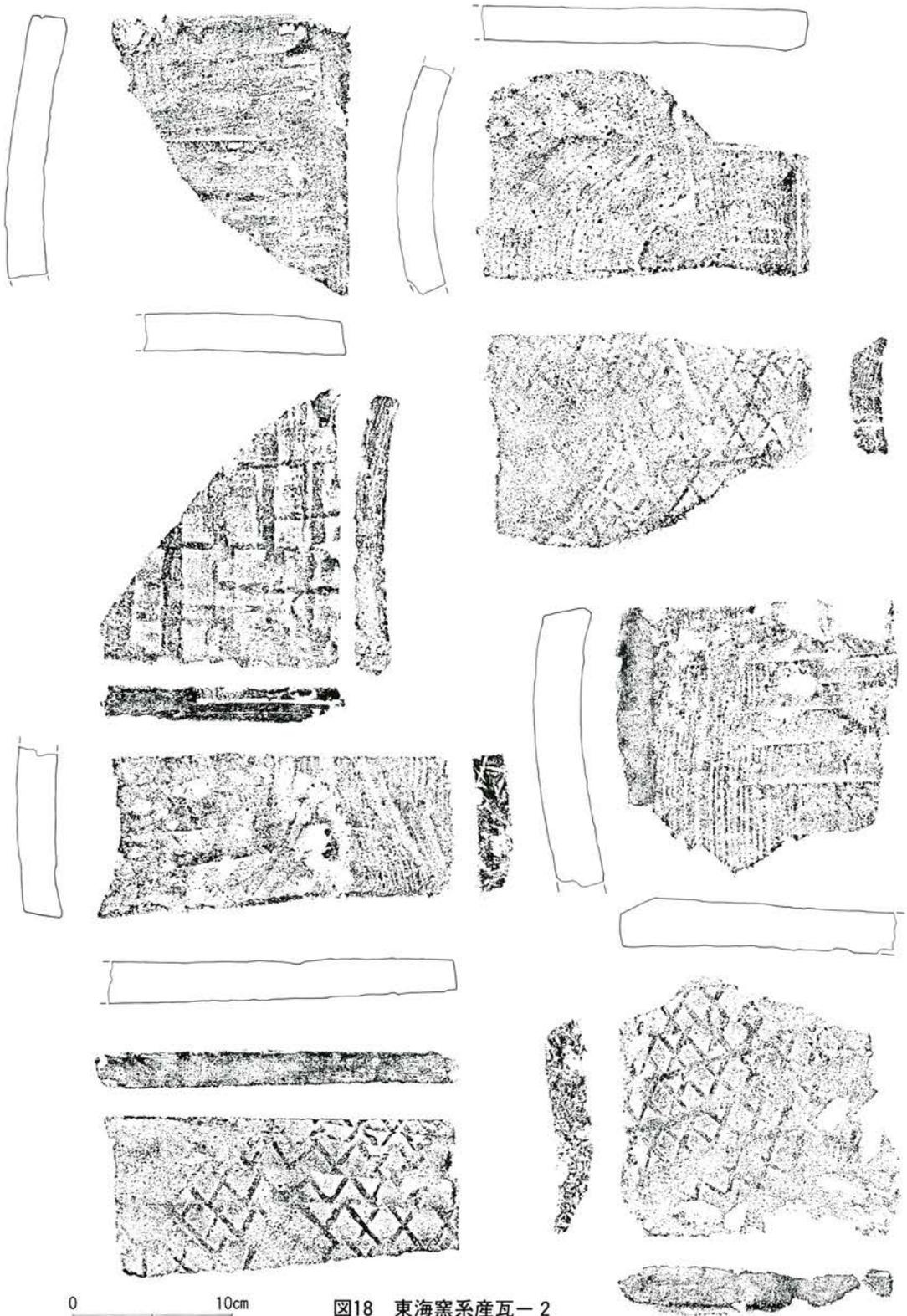


图17 東海窯系産瓦-1



0 10cm

图18 東海窯系産瓦-2



図19 東海窯系産瓦一3

0 10cm

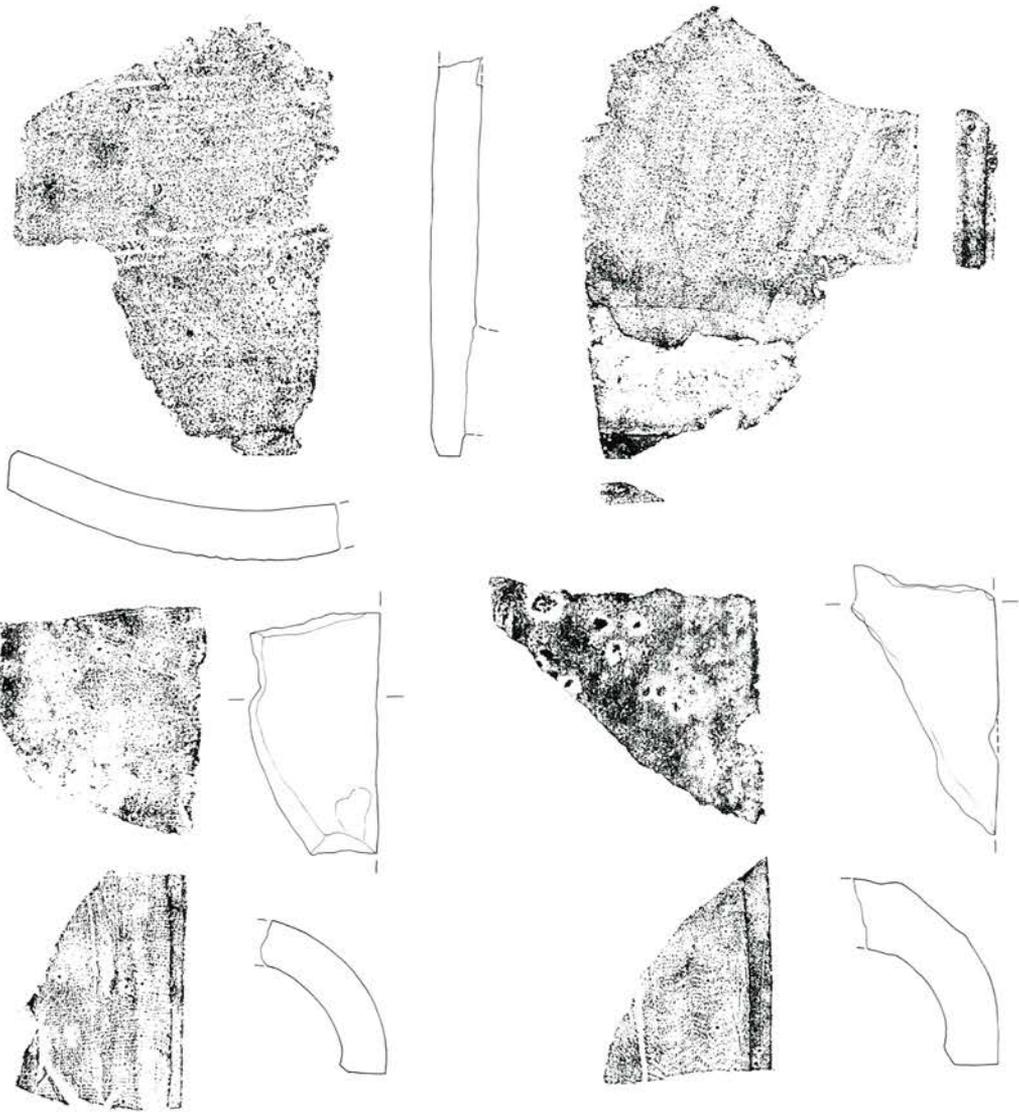


図20 東海窯系産瓦-4

0 10cm

2. 瓦以外の遺物

3 溝出土遺物 (図21・図版25)

1～14は上層出土、15・16は中層出土、17～19は下層出土のかわらけである。

1は手捏ね成形。口径8.2cm 器高2cmである。体部外面に強いナデを廻らせている。口端部は丸みを帯びている。淡赤褐色を呈し、微細な石英、雲母を含む胎土である。焼成は良好である。

2は手捏ね成形。口径8.8cm 器高2.2cmである。体部外面に強いナデが廻り、口端部は丸みを帯びる。淡赤褐色を呈し、微細な石英、雲母を含む胎土である。焼成は良好である。

3は手捏ね成形。口径9.7cm 器高1.6cmである。指頭による強いナデが上に抜けている。口端部には凹線が廻る。明淡赤灰色を呈し、微細な石英、黒雲母を多く含む胎土である。焼成は良好。

4はロクロ成形。口径10cm 器高1.9cm 底径7cmである。底径が大きく外面にナデによる稜がしっかりと付く。淡赤灰色を呈し、微細な石英、針状物を含む胎土である。焼成は良好である。

5はロクロ成形。口径8.2mm 器高1.6cm 底径6.2cmである。外面にナデによる稜がつき、ナデが上に抜けている。明赤灰色を呈し、微細な石英、雲母を多く含む胎土である。焼成は良好である。

6はロクロ成形。口径8.6cm 器高1.6cm 底径6.5cmである。底径が大きい。淡赤灰色を呈し、微細な雲母を多く含む胎土である。焼成は良好である。

7はロクロ成形。口径8.8cm 器高1.9cm 底径7.6cmである。外面に強いナデが廻り、底径が大きい。淡赤褐色を呈し、石英、雲母、針状物を含む胎土である。焼成は良好である。

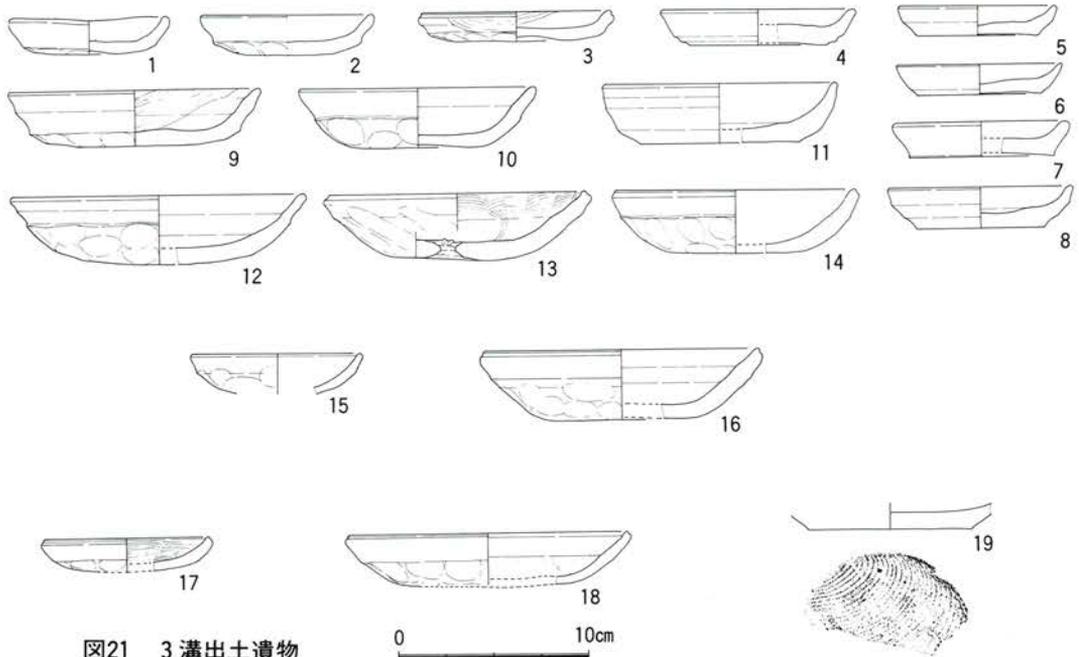


図21 3 溝出土遺物

8はロクロ成形。口径9.5cm 器高2.2cm 底径6.6cmである。外面に強いナデが廻り、稜が付く。淡赤灰色を呈し、微細は石英、雲母、針状物を含む胎土である。焼成は良好である。

9は手捏ね成形。口径15.5cm 器高4.6cmである。外面に強いナデが廻り、手づくね部分との堺に稜線が付く。淡赤褐色を呈し、微細な石英を多く含む気泡の多い胎土である。焼成は良好である。

10は手捏ね成形。口径12.4cm 器高3.2cmである。器壁が厚く全体にぼってりした印象を受ける。淡褐色を呈し、赤色の粘土粒のクサリ礫を含む気泡が多い粗い胎土である。焼成は良好である。

11はロクロ成形。口径12cm 器高3.2cm 底径8.4cmである。底径が大きく、体部外面に強いナデによる稜が付く。淡褐色を呈し、細かい黒雲母が多く含まれる気泡の多い胎土である。

12は手捏ね成形。口径15.5cm 器高4.6cmである。器高が低く、内外面に強いナデによる稜が付く。淡赤褐色を呈し、微細な石英を含み気泡の多いザックリした胎土である。焼成は良好である。

13は手捏ね成形。口径14cm 器高3.6cmである。器高が低く、つぶれた感じを受ける。口端部は角ばり凹線が僅かに付く。淡赤褐色を呈し、砂の少ない良質の胎土である。

14は手捏ね成形。口径12.4cm 器高3.4cmである。口端部に僅かに凹線が付く。明赤褐色を呈し、微細な石英、針状物を含む胎土である。焼成は良好である。

15は手捏ね成形。口径8.8cmである。器壁が薄く口端部は丸く収めている。灰褐色を呈し、微細な石英を多く含むきめ細かい胎土である。焼成は良好である。

16は手捏ね成形。口径14.4cm 器高3.7cmである。器壁は厚いが、口端部は角ばり僅かに凹線が付く。赤褐色を呈し、砂が少ない良質の胎土である。焼成は良好である。

17は手捏ね成形。口径8.5cm 器高1.8cmである。口端部は角ばり僅かに凹線が付く。内面に強いナデが入る。淡褐色を呈し、微細な石英を多く含む良質の胎土である。

18は手捏ね成形。口径14.6cmである。薄い器壁で口端部近くに強いナデが見られる。口端部は上方につまみ上げられて凹線が付く。淡褐色を呈し、微細な石英、雲母を僅かに含む良質の胎土である。

焼成は良好であり、焼きしまっている。

19はロクロ成形。底径8.6cmである。底部の糸切り痕は、静止状態での切り離しを思わせる粗い糸目が残る。淡赤灰色を呈し、微細な雲母、針状物を多く含む細かい砂の多い胎土である。焼成は良好である。

3 溝上面出土遺物 (図22・図版26)

いずれもかわらけである。

1は手捏ね成形。口径8cm 器高1.8cmである。口縁部内側がやや肥厚するが、端部は丸くおさめる。口縁にタールが付着する。淡赤灰色を呈し、微細な石英、雲母、針状物を多く含む胎土である。焼成は良好である。

2は手捏ね成形。口径8.6cm 器高1.6cmである。端部は

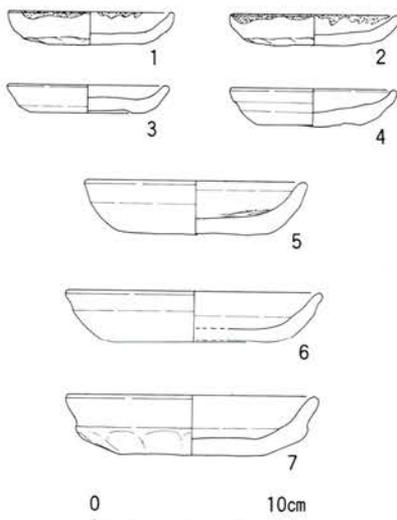


図22 3 溝上面出土遺物

丸くおさめている。淡赤灰褐色を呈し、微細な石英、雲母と細かい土丹粒も見られる。焼成は良好である。

3はロクロ成形。口径4.3cm 器高1.5cm 底径6cmである。体部下半に緩い稜が付く。明赤灰色を呈し、微細な石英、雲母、針状物を含む胎土である。焼成は良好である。

4はロクロ成形。口径8.5cm 器高2cm 底径5.6cmである。体部外面に強いナデによる稜が付く。淡赤灰色を呈し、微細な石英、雲母、針状物とクサリ礫、土丹粒を含む胎土で、焼成は良好である。

5はロクロ成形。口径9.5cm 器高2.2cm 底径6.6cmである。器壁が厚く、端部は丸くおさめている。淡赤灰色を呈し、細かい雲母、クサリ礫を含む粗い胎土である。焼成は良好である。

6はロクロ成形。口径9.5cm 器高2.2cm 底径6.6cmである。口端部外面がナデによりやや開く。赤灰色を呈し、細かい雲母、針状物を含む気泡が多い粗い胎土である。焼成は良好である。

7は手捏ね成形。口径9.5cm 器高2.2cm 底径6.6cmである。器壁が厚くぼったりした感じを受ける。口端部は丸くおさめている。淡赤灰色を呈し、微細な石英、雲母を多く含む胎土である。焼成は良好である。

升状遺構・2溝出土遺物(図23・図版25)

1～3は升状遺構、4～6までは2溝出土のかわらけである。

1はロクロ成形。口径9.6cm 器高1.5cm 底径7.3cmである。薄い器壁で器高が低く、底径が大きい。淡赤灰色を呈し、微細な石英、雲母を含む良質の胎土である。焼成は良好であり硬く焼きしまっている。

2はロクロ成形。口径7.6cm 器高1.7cm 底径6.2cmである。底径が大きく、体部の立ち上がりが強い。淡赤灰色を呈し、微細な石英を含む胎土である。焼成は良好である。

3は手捏ね成形。口径9.5cm 器高2.2cm 底径6.6cmである。器高が低く体部の立ちが低い口端部は強いナデのために突帯状になる。淡乳褐色を呈し、微細な石英、雲母を含む良質な胎土である。焼成は良好である。

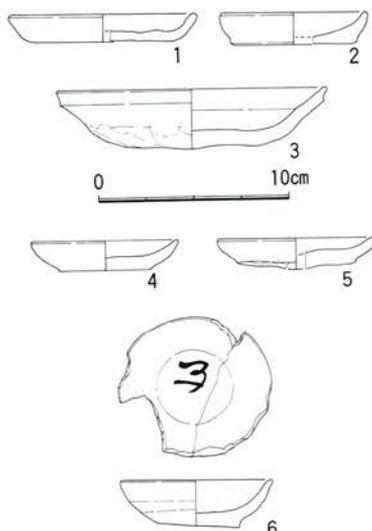


図23 升状遺構・2溝出土遺物

4はロクロ成形。口径7.5cm 器高1.6cm 底径4.8cmである。体部はやや丸みを帯びるが器高は低くつぶれた印象を受ける。淡灰褐色を呈し、微細な石英、雲母を多く含んでいる胎土である。焼成は良好である。

5は手捏ね成形。口径8cm 器高1.5cmである。厚い器壁に手捏ねによる指頭の圧痕が良く残る。赤灰色を呈し、微細な石英、雲母を含む胎土である。焼成は良好である。

6はロクロ成形。口径8.5cm 器高2.5cm 底径4.3cmである。底部の厚さにくらべ体部は薄くやや丸みを持って立ち上がる。口端部は丸くなくやや角ばっておさまる。淡赤灰色を呈し、微細な雲母、針状物、クサリ礫を含む胎土である。焼成は良好である。内底面に「子」の墨書がある。

1 溝出土遺物 (図24・図版25・27)

1～8はかわらけである。

1はロクロ成形。口径12cm 器高3.2cm 底径6.8cmである。体部は直線的にハの字に開く。体部外面にナデによる稜が僅かに付く。淡褐色を呈し、微細な石英、雲母、針状物を含む胎土である。焼成は良好である。

2はロクロ成形。口径11.6cm 器高3.7cm 底径7cmである。薄い器壁をいっきに引き上げてつくられている。器高は深く、体部は丸みをもって立ち上がる。赤灰褐色を呈し、長石、石英、雲母を多く含む粗い胎土である。焼成は良好である。

3はロクロ成形。口径11.6cm 器高3.3cm 底径7.8cmである。厚い器壁の体部側面にナデによる稜が付く。淡褐色を呈し、石英、雲母、クサリ礫、土丹を含む粗い胎土である。焼成は良好である。

4はロクロ成形。口径12.6cm 器高3.2cm 底径8.4cmである。ナデのために体部外面は丸みに欠けて、口端部にかけて外反する。淡赤灰色を呈し、石英、雲母、針状物、クサリ礫を含む粗い胎土である。焼成は良好である。

5はロクロ成形。口径12.8cm 器高3.5cm 底径7.7cmである。薄い器壁でやや丸みをもって立ち上がる。口端部は丸くおさめる。赤灰色を呈し、微量の雲母、クサリ礫を含む粉っぽい胎土である。焼成は良好である。

6はロクロ成形。口径14cm 器高3.5cm 底径9cmである。体部は外反して広がる。口端部は丸くおさめる。赤灰色を呈し、針状物、クサリ礫を含む粉っぽい胎土である。焼成は良好である。

7は手捏ね成形。口径9.4cm 器高1.9cmである。口端部に凹線が付く。赤灰色を呈し、微細な石英、雲母を含む胎土である。焼成は良好である。

8はロクロ成形。口径8.4cm 器高2.4cm 底径4.9cmである。丸みの強い体部である。淡褐色を呈し、砂粒を多く含む胎土である。焼成は良好である。

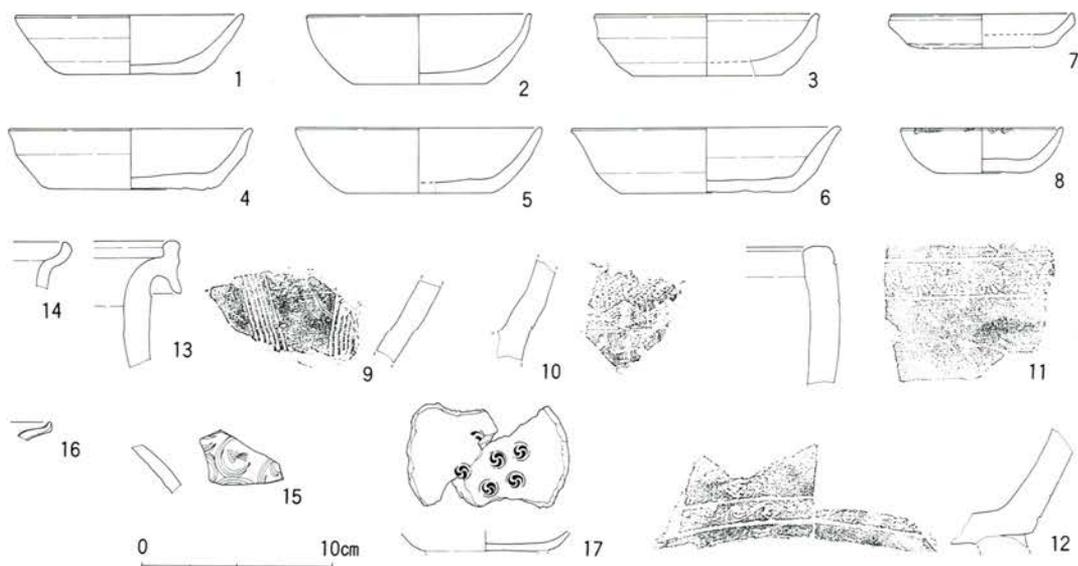


図24 1 溝出土遺物

9は常滑の播鉢である。条線は6本で内面は磨耗している。

10は手焙り体部片である。瓦質で外面は黒色である。珠文と沈線にスタンプによる装飾を施す。

11は手焙りである。瓦質で外面は黒色である。外面に2本の沈線と菊花のスタンプによる装飾を施している。

12は手焙りの底部片である。瓦質で外面は黒色である。外面底部まじかに2本の沈線と唐草による装飾を施している。

13は常滑甕の口縁部片である。頸部が強く外反して、突帯状の口縁が付く。

14は瀬戸行平の口縁部片である。口端部を折曲げて上方へひきあげている。

15は青白磁梅瓶の肩部である。素地は灰白色で釉は透明な水色を呈す。

16は青磁鉢の口縁部片である。素地は灰白色で釉は暗緑色を呈す。

17は漆器椀である。体部上半と口端部を欠く。内底部を巴文のスタンプで飾っている。薄手の木地で内湾しながら立ち上がると思われる。市内遺跡の調査で多く出土するタイプの漆器である。この他に1溝では、草履芯、折敷の残片が出土している。

北辺雨落ち溝上層出土遺物 (図25・図版26・27)

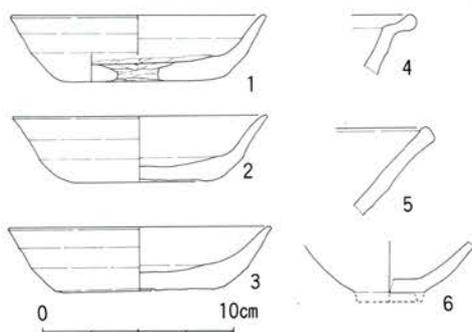


図25 北辺雨落ち溝上層出土遺物

1～3はかわらけである。

1はロクロ成形。口径13.2cm 器高3.5cm 底径8.6cmである。厚い底部から体部を直線的にやや外反させながら立ち上げている。外面にナデによる稜がつき、底面中央が穿孔されている。灰褐色を呈し、細かい雲母、針状物を含む胎土である。焼成は良好である。

2はロクロ成形。口径13.2cm 器高3.5cm 底径7cmである。体部は外反しながら立ち上がる。灰褐色を呈し、微細な石英、雲母、針状物を含む胎土である。

ある。焼成は良好である。

3はロクロ成形。口径13.5cm 器高3.5cm 底径7.8cmである。体部は直線的にハの字形に開き、口端部で外反する。灰褐色を呈し、微細な石英、雲母、針状物を含む胎土である。焼成は良好である。

4は瀬戸折縁皿である。口端部は強く外に折れ、端部は丸くおさまる。内外面に灰釉がかかる。

5は山茶碗窯系捏ね鉢である。口端部はやや角ばるが丸くおさめている。

6は瀬戸碗である。釉は灰釉で厚くかけられている。体部はやや丸みを帯びながら立ち上がる。

かわらけ溜り出土遺物 (図26・図版26)

5区、翼廊の遺構面上でまとまって出土したかわらけである。

1はロクロ成形。口径7.8cm 器高2.1cm 底径4.6cmである。体部は丸みを帯び、口端部はやや外反する。淡赤灰色を呈し、微細な雲母、針状物を含む胎土である。焼成は良好である。

2はロクロ成形。口径11cm 器高2.8cm 底径5.8cmである。体部は丸みを帯びて立ち上がる。赤灰色を呈し、微細な雲母、針状物、クサリ礫を含む胎土である。焼成は良好である。

3はロクロ成形。口径12.6cm 器高3.7cm 底径7.6cmである。体部は丸みを帯び、内湾しながら立ち上がる。赤灰色を呈し、微細な雲母、針状物を含む胎土である。焼成は良好である。

4はロクロ成形。口径12.8cm 器高3.7cm 底径7.8cmである。薄い器壁が丸みを帯び、内湾しながら立ち上がっている。赤灰色を呈し、微細な雲母、針状物を含む胎土である。

5はロクロ成形。口径12.5cm 器高3.1cm 底径7.8cmである。薄い器壁は内湾して立ち上がり、口端部は丸くおさめる。淡赤灰色を呈し、雲母を含む粉っぽい胎土である。焼成は良好である。

6はロクロ成形。口径12.8cm 器高3.3cm 底径7.2cmである。薄い器壁が内湾して立ち上がる。赤灰色を呈し、粉っぽい胎土である。焼成は良好である。

7はロクロ成形。底径7.6cmである。薄い器壁で内湾して立ち上がる。口端部を欠く。赤灰色を呈し、微細な雲母を含む粉っぽい胎土である。

8はロクロ成形。口径12.8cm 器高3.7cm 底径7.8cmである。器壁は薄く内湾して立ち上がる。赤灰色を呈し、細かい針状物を含む胎土である。焼成は良好である。

9はロクロ成形。口径13.4cm 器高3.7cm 底径6.9cmである。体部はナデにより直線的に開き、僅かに稜線が付く。口端部は丸くおさめる。淡赤灰色を呈し、微細な石英、雲母、針状物を含む胎土である。焼成は良好である。

10はロクロ成形。口径12.8cm 器高3.5cm 底径8cmである。器壁は薄く内湾して立ち上がる。淡赤灰色を呈し、微細な雲母、針状物を含む粉っぽい胎土である。焼成は良好である。

11はロクロ成形。口径13.8cm 器高3.6cm 底径7.6cmである。器壁は薄く内湾して立ち上がり、口端部は内面に肥厚する。淡赤灰色を呈し、微細な石英、雲母を含む粉っぽい胎土である。焼成は良好である。

12はロクロ成形。口径13cm 器高3.5cm 底径7.2cmである。薄い器壁の体部は内湾して立ち上がり、

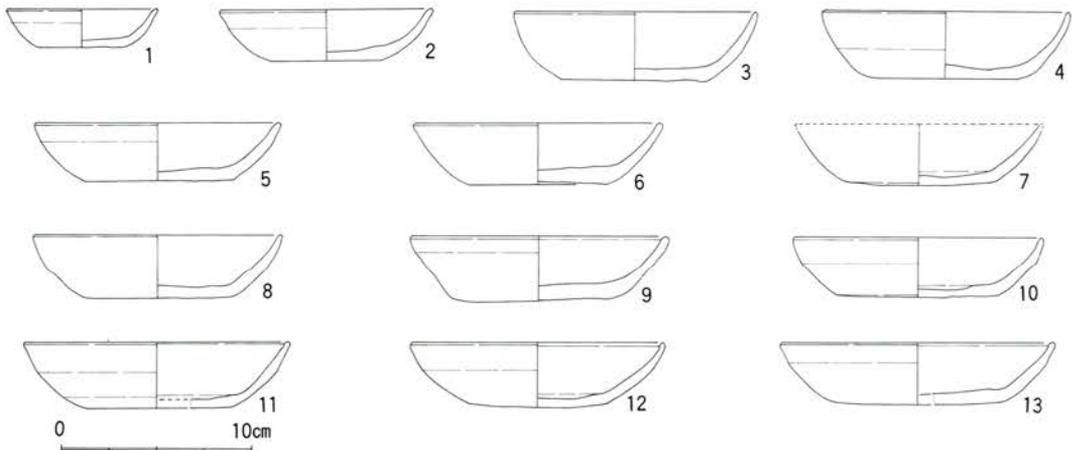


図26 かわらけ溜り出土遺物

口端部は内面に肥厚する。淡褐色を呈し、微細な雲母を含む胎土である。焼成は良好である。

13はロクロ成形。口径14.2cm 器高3.4cm 底径8.6cm である。薄い器壁の体部は内湾しながら立ち上がり、口端部は内面に肥厚する。淡赤褐色を呈し、微細な石英、雲母を多く含む粉っぽい胎土である。焼成は良好である。

地山面出土遺物 (図27・図版26・27)

1～6 はかわらけである。

1はロクロ成形。口径8cm 器高2.5cm 底径5.4cm である。体部下半は強いナデにより大きく屈曲する。口端部は上方へつまみあげられ、外面は縁帯状になる。淡褐色を呈し、微細な石英、雲母を含む胎土である。焼成は良好である。3区出土。

2はロクロ成形。口径9.4cm 器高2cm 底径5.4cm である。体部下半は強いナデのために、大きく屈曲し稜線ができる。口端部は上方へつまみあげられて、やや外反し縁帯状になる。淡赤灰色を呈し、石英、雲母の砂粒が多く含まれる胎土である。焼成は良好である。2区出土。

3は手捏ね成形。口径9.5cm 器高2.1cm である。体部は強いナデで、外反しながらも口端部は丸くおさまる。淡赤灰色を呈し、微細な石英を含む胎土である。焼成は良好である。2区出土。

4はロクロ成形。底径8.6cm である。底面に残る糸切り痕は静止糸切りで、粗い糸目が付く。淡赤灰色を呈し、石英、針状物が多く含まれる胎土である。焼成は良好である。3区出土。

5は手捏ね成形。口径14.7cm 器高2.4cm である。薄い器壁の底部に指頭痕とナデによる稜が明瞭に付く。口端部はつまみあげられて凹線が廻る。淡赤灰色を呈し、微細な雲母を含む良質の胎土である。焼成は良好である。3区出土。

6は手捏ね成形。口径14.6cm 器高3.6cm である。体部下半の内外面に指頭痕が良く残っている。底面は指頭により窪みが付く。口端部には凹線が廻る。灰褐色を呈し、微細な石英、雲母を多く含む胎土である。焼成は良好である。5区出土。

7は渥美甕の口縁部片である。内外面にハケによる施釉が見られる。9区砂利面下出土。

8は青磁楡描文皿で底径は4.6cm である。素地は灰色を呈し、釉は透明な淡緑色を呈する。礎石24の根石の間から出土。

9～11は鉄釘である。9は10cm、10は12cm、11は6.5cm の長さである。いずれも角釘で頭は叩きつぶしてから折曲げている。3区出土。

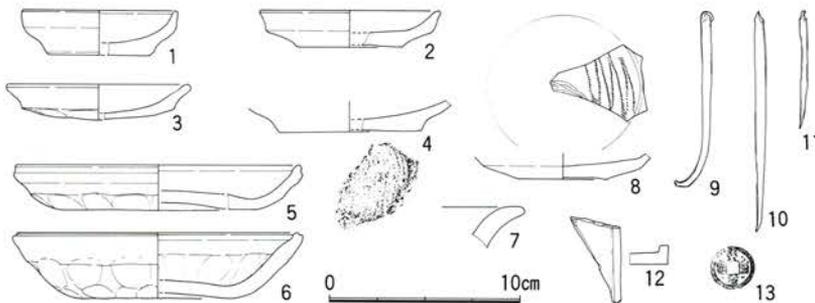


図27 地山面出土遺物

12は硯片である。淡緑色の粘板岩質である。9区中門出土。

13は北宋銭（1068年初鑄）で熙寧元宝である。3区出土。

遺構面出土遺物（図28・図版26・27）

1～7はかわらけである。

1は手捏ね成形。口径8.3cm 器高1.4cm である。器高が低い。口端部の内側の強いナデにより内湾する。淡褐色を呈し、微細な雲母を含む粉っぽい胎土である。焼成は良好である。

2は手捏ね成形。口径8.7cm 器高1.7cm である。指頭とナデの境目の稜は弱く、端部は丸くおさめる。淡褐色を呈し、微細な雲母、針状物を含む胎土である。焼成は良好である。

3はロクロ成形。口径10.8cm 器高3.3cm 底径6.5cm である。器壁は薄く、内湾しながら立ち上がる。口端部は丸くおさめている。淡赤灰色を呈し、微細な雲母、針状物を含む粉っぽい胎土である。焼成は良好である。

4はロクロ成形。口径13.2cm である。体部は内湾しながら立ち上がり口端部は肥厚する。淡赤灰色を呈し、微細な雲母、針状物を含む粉っぽい胎土である。焼成は良好である。

5はロクロ成形。口径12.4cm 器高3.3cm 底径7.8cm である。体部外面にナデによる稜が付く。淡褐色を呈し、微細な石英、雲母、針状物を含む胎土である。焼成は良好である。

6はロクロ成形。口径13.8cm 器高3.3cm 底径8.5cm である。器壁は薄く内湾しながら、立ち上がり口端部はやや肥厚する。淡赤灰色を呈し、微細な雲母を含む粉っぽい胎土で、焼成は良好である。

7はロクロ成形。口径14.7cm 器高3.6cm 底径10cm である。器壁は薄く内湾して立ち上がる。外面に緩い稜が付き、端部は丸くおさめる。淡赤灰色を呈し、微細な雲母、針状物を含む胎土である。焼成は良好である。

8～11は常滑甕の口縁部片である。

8は縁帯が広く、断面N字形を呈す。

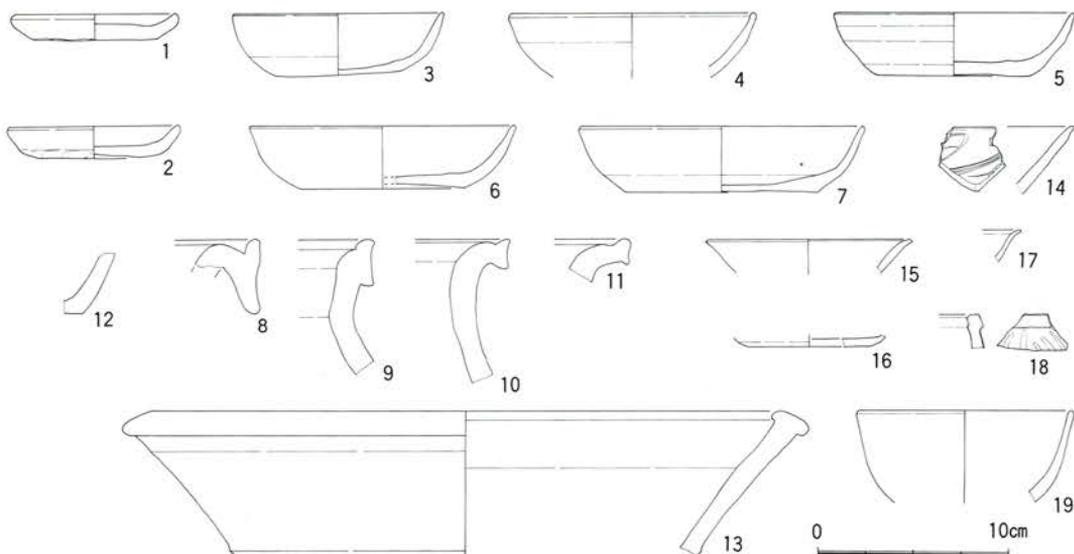


図28 遺構面出土遺物

9は縁帯の幅は狭いが、頸部に貼り付いてしまっている。

10・11は強く頸部を折り返して端部を作っている。ナデとつまみ上げで端部をおさめている。

12は瓦質香炉の底部である。内外面ともに丁寧に磨きををかけている。

13は瓦質手焙りで口径32.5cmである。器壁が薄く、大きさの割りに軽い。断面は灰色で外面は暗灰色を呈す。外面に指頭によるナデが付く。

14は青磁碗である。劃花文が内面に付く。透明な淡緑色の釉がかかる。

15・16は白磁皿である。15は口径10.4cm、16の底径は6.2cmである。

17は青白磁の皿である。透明な水色の釉がかかる。

18は青白磁である。直立する口縁で角ばった端部となる。香炉か。

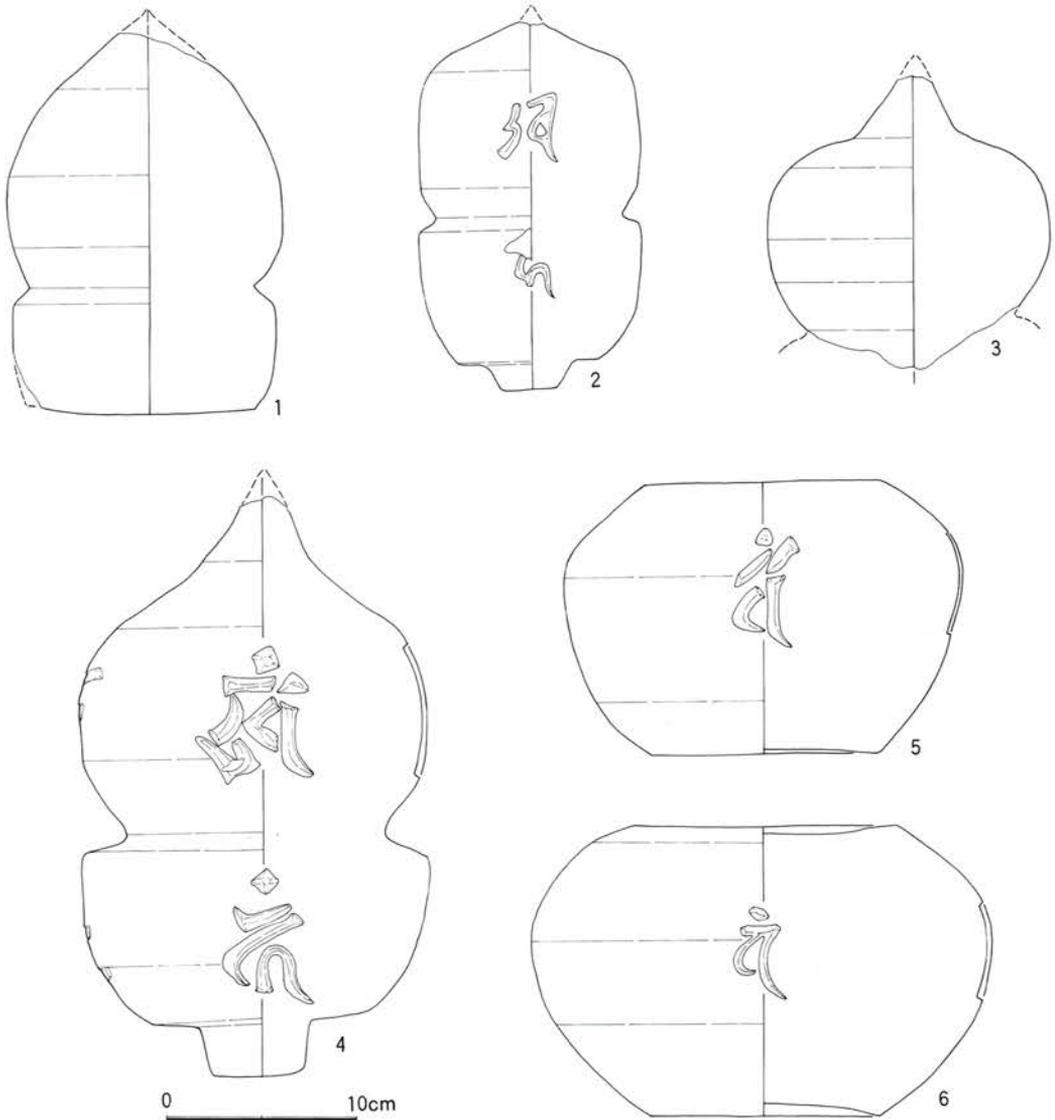


図29 包含層出土五輪塔

19は磁器碗である。宝永の火山灰直下出土である。外面は暗緑色、内面は灰褐色を呈する。

包含層出土五輪塔（図29・図版27）

1～4は空風輪である。1・2は形が砲弾型を呈するので時期が下るものと思われる。3・4は概ね室町期のものと思われる。

2・4には四方に五大種子の瓦・瓦が見られる。5・6は水輪である。これにも五大種子の瓦が見られる。いずれも室町期のものと思われる。

すべて包含層である砂層中からの出土である。背後の西ヶ谷からの流水で流されて来たものか、いずれからか持ち運ばれて来たものと思われる。

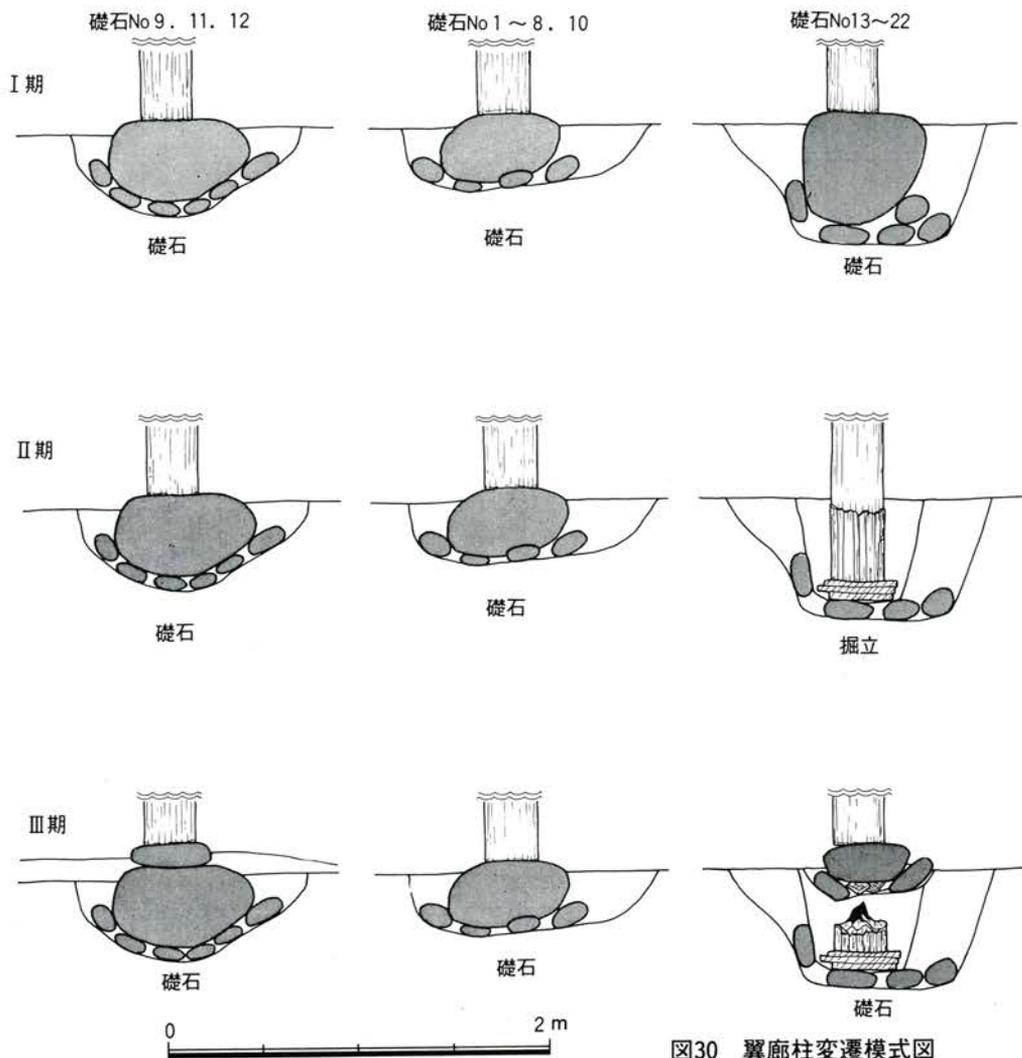


図30 翼廊柱変遷模式図

第4章 まとめ

今年度の発掘調査は、翼廊の確認に主眼が置かれた。個々の成果については各章の中で述べて来たとおりでである。翼廊は薬師堂の取り付け部分から、中門までの地域を調査してⅠ～Ⅲ期までの遺構を検出、確認した。中門部分では、北辺雨落ち溝にかかる橋を検出、確認した。また遣り水に係わると思われる溝を検出したことは、伽藍と苑池との関係を考える上で重要である。

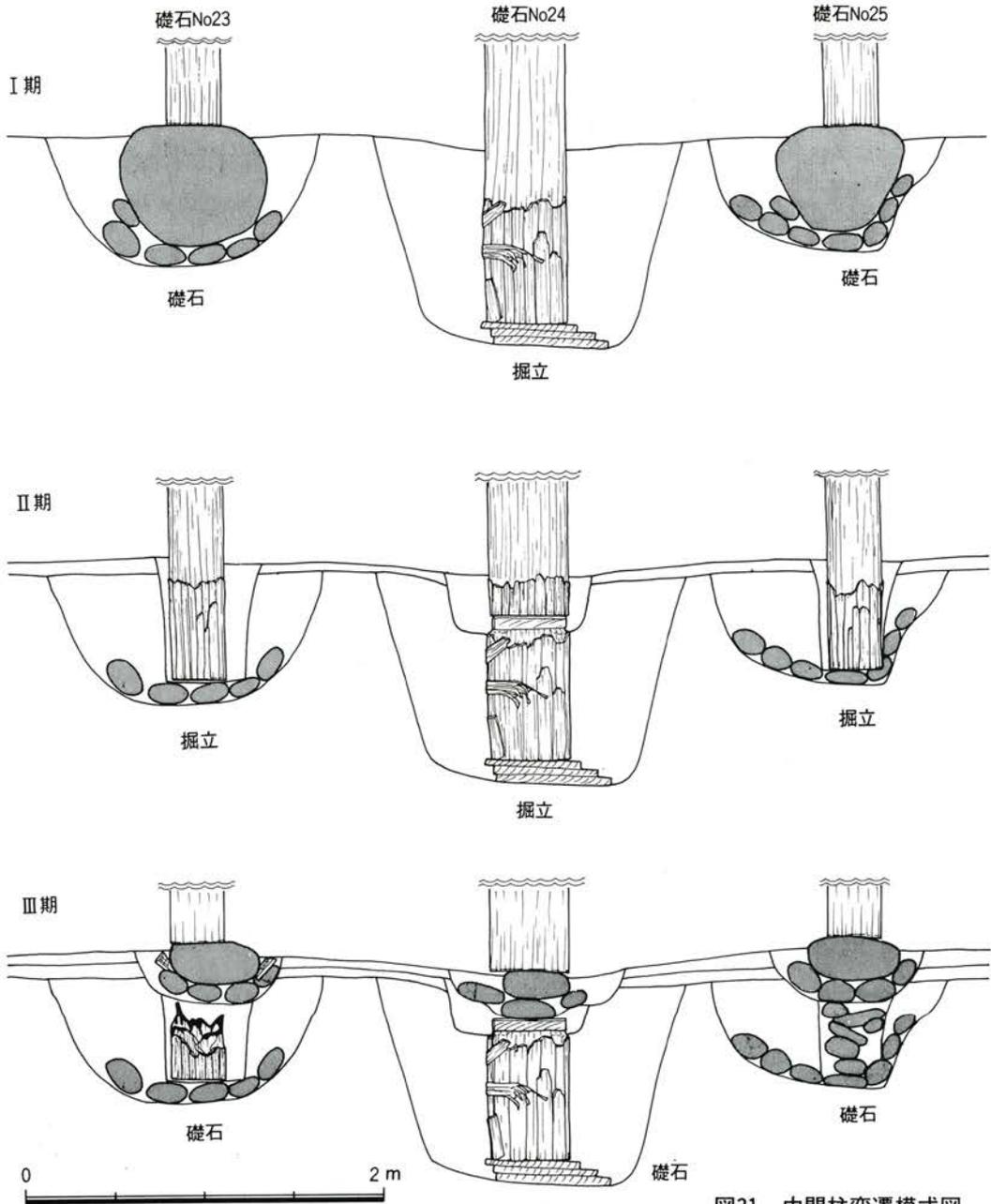


図31 中門柱変遷模式図

遺構の変遷

翼廊では礎石の使われ方から、Ⅰ～Ⅲ期の変遷を考えることができる。遺構面に残る礎石は、かぎの手に曲がる南北列と東西列では異なった様相を呈している。

南北列では径70～100cmの大きな礎石を使い、径30cm大の玉石を根石に使用して礎石と掘方の間を埋めている。掘方は荒されておらず、礎石の据え直しなどはない。礎石9・11・12の上には、径40～

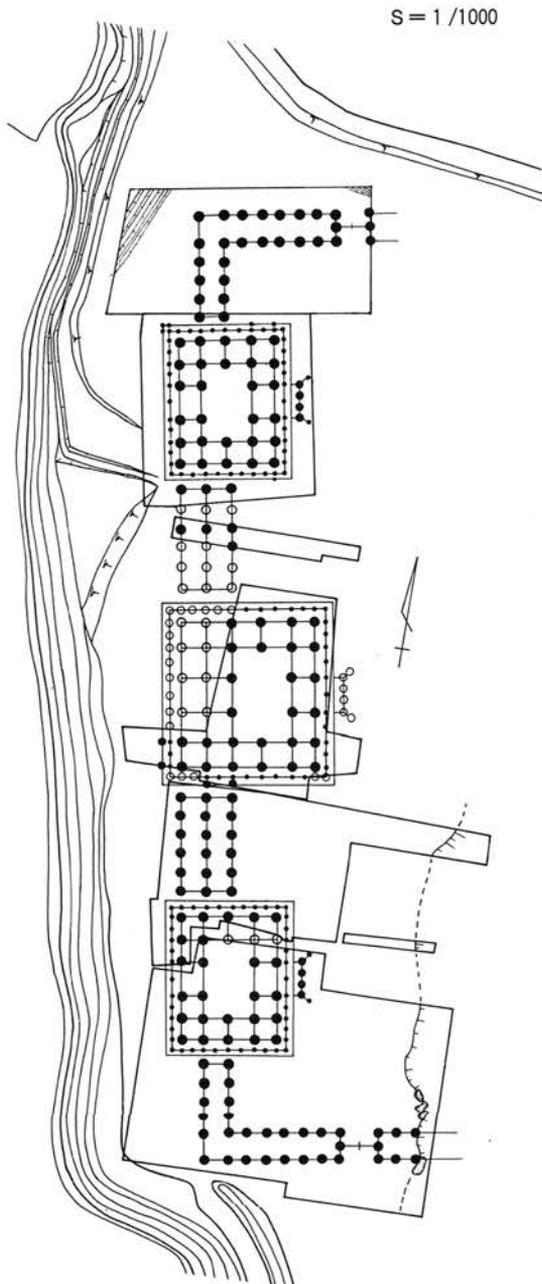


図32 今年度までに確認した遺物跡

60cm大の小さな礎石が隙間に第Ⅰ・Ⅱ期の瓦を詰めて据えられている。

東西列では径40～60cm大の礎石が使われ、根石には第Ⅰ・Ⅱ期の瓦が敷き込まれ使われていた。この礎石の真下に、礎板を敷いた径30cmに掘立柱の柱根が遺存していた。柱根の先端は黒く炭化していた。さらにこの下に径30cm大の根石があることが確認された。

少なくとも南北列では2時期に、東西列では、3時期に分類される。

南北列の2時期目と東西列の3時期目の礎石は、共に根石の代りに第Ⅰ・Ⅱ期の瓦を使用していることからⅢ期遺構に伴う礎石と考えられる。南北列のその他の礎石は創建から廃絶まで同じ礎石を使い続けたと考えられる。礎石の表面が焼けて剥離していること、Ⅱ期遺構に伴う掘立柱が焼けていることから翼廊は2度火災に遭っていると思われる。

中門でも棟柱以外の礎石は東西列の礎石と同じ変遷で、Ⅰ～Ⅲ期に分類される。

棟柱もⅠ～Ⅲ期に分類されるが、礎石が使われるのはⅢ期だけで、Ⅰ・Ⅱ期は掘立柱であった。

延慶3年の火災以降、翼廊はおそらく再建されなかったと思われる。それは翼廊遺構面上でかたまって出土したかわらけの時期が、14世紀の中頃に比定できるからである。

中門北側で検出した橋は、4本ある橋脚がいずれも地山面から掘り込まれていること、橋に伴い中門正面で幅を広げていた雨落ち溝が狭められた

時期は砂利面下で出土した渥美甕の口縁が13世紀前半に比定できることから、少なくとも橋はⅠ・Ⅱ期に伴うと考えられる。

4本検出した溝のうち1溝は、雨落ち溝のコーナーを壊していること、1溝に伴う柵状遺構が翼廊を横切っていること、そして出土した遺物から15世紀初頭の遺構と思われる。また柵状の柱根の先端は炭化しており、応永12年の火災を考えさせられるものである。

2溝は遺物から13世紀後半に開削され、おそらく永福寺廃絶まで使われ続けた溝であろう。

3溝は下層から出土した鏡瓦と宇瓦（YAⅠ01・YAⅡ01・YNⅠ01）、薄手の手捏ねと静止糸きり痕を持つかわらけから、開削の時期はⅠ期の遺構に伴う時期と考えられる。

4溝は時期を決める遺物が出土しなかったが、溝の含土が3溝と共通なので3溝同様にⅠ期の遺構に伴う時期に開削されたと思われる。

3・4溝は上層の遺物から13世紀前半まで機能していたと思われる。

升状遺構の時期は遺構の切りあいから3溝よりも新しく、2溝よりも古い。出土したかわらけから13世紀の後半と思われる。

Ⅰ～Ⅲ期の分類の時期を、永福寺年表と対比すると以下ようになる。

年 表	翼 廊	中門棟柱	
創 建	礎 石	掘 立 柱	Ⅰ期
寛元・宝治 修 理			↓
建 替 え	掘 立 柱	掘 立 柱	Ⅱ期
弘 安 3 年 火 災	↓	↓	
10 年 再 建 供 養	礎 石	礎 石	Ⅲ期
延 慶 3 年 火 災			
應 永 12 年 火 災 永 福 寺 炎 上			

翼廊は再建されない。

翼廊の規模がほぼ確認されて、Ⅰ～Ⅲ期にわたる遺構の変遷が明らかになった。これまでの調査では判らなかつた建替えの時期や東石、縁束、雨落ち溝を検出、確認できたことは、これからの調査だけでなく、永福寺の復原を考える上で重要な成果である。

翼廊の完掘、苑池の調査、遣り水の調査などが今後の課題である。

末筆ながら、多くの諸先生、諸先輩から貴重な御教示を受けたこと、周辺住民の深い御理解を賜わり、無事今年度の調査を終えたことを記して深く感謝する次第である。



▲1. 調査区全景(西より)

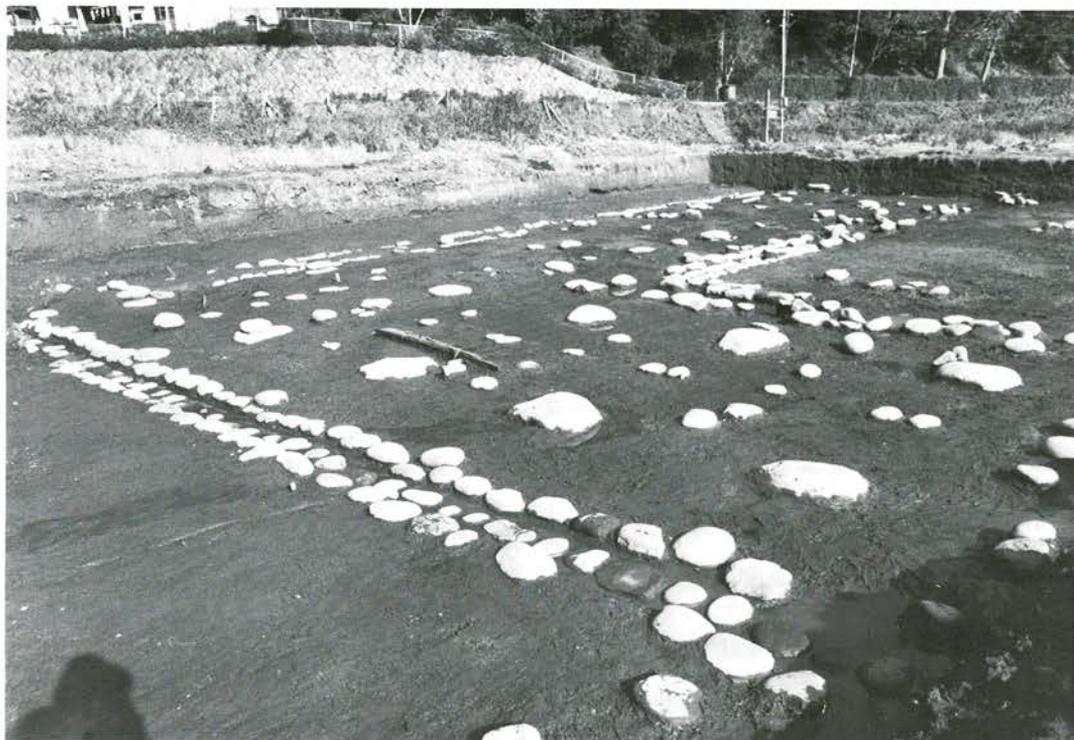
▼2. 調査区全景(南より)





▲ 1. 調査区全景(東より)

▼ 2. 調査区全景(南西より)

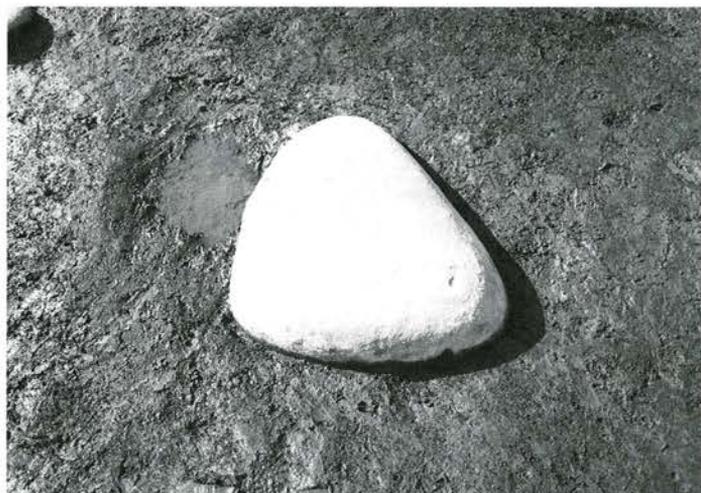




▲ 1. 雨落ち溝(東西列の南辺)

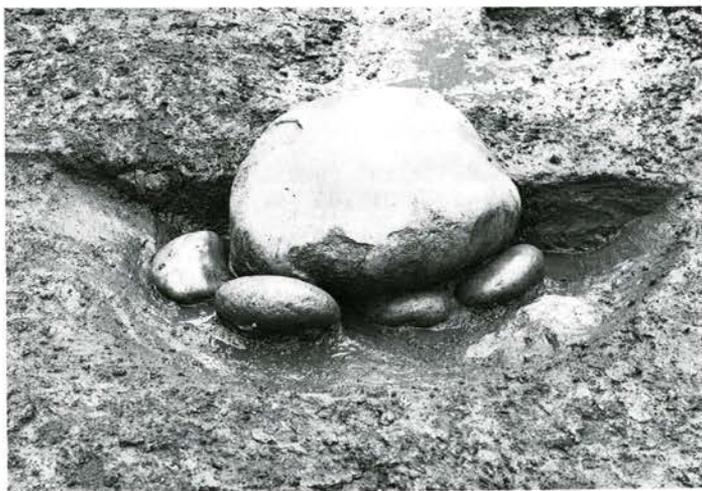
▼ 2. 雨落ち溝(南北列の西辺)



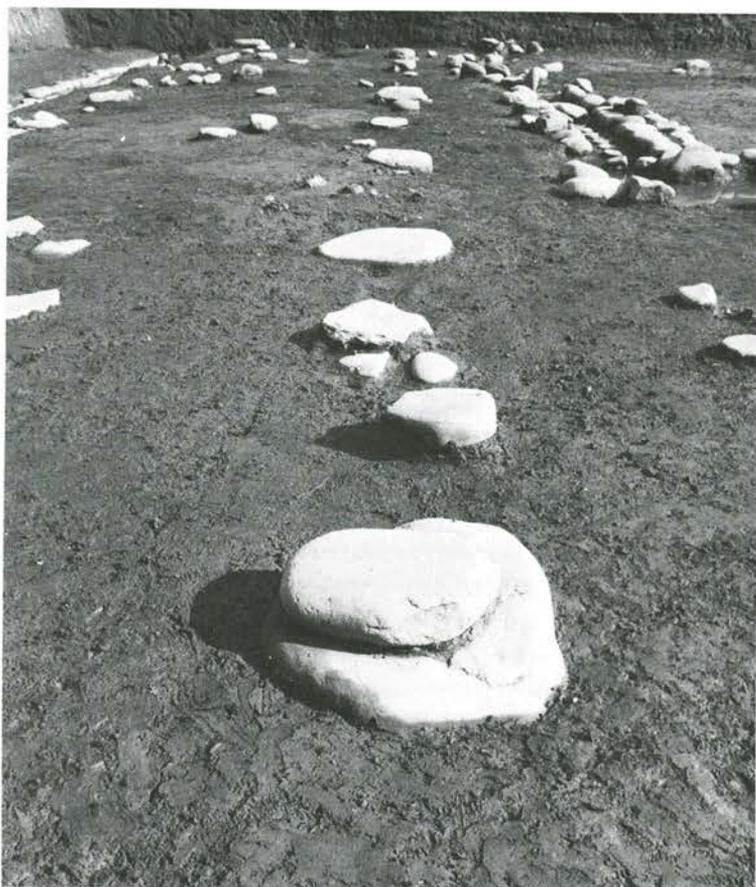


◀ 1. 礎石柱座面に残る柱印影
(礎石No 8)

▶ 2. 南北列礎石下の根石状況
(礎石No 4)

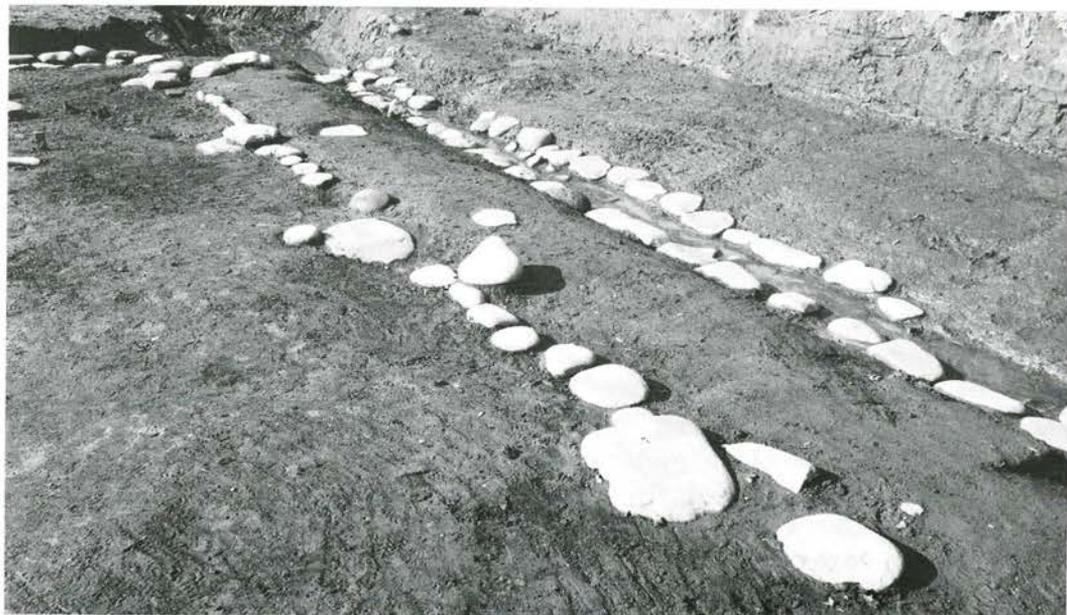


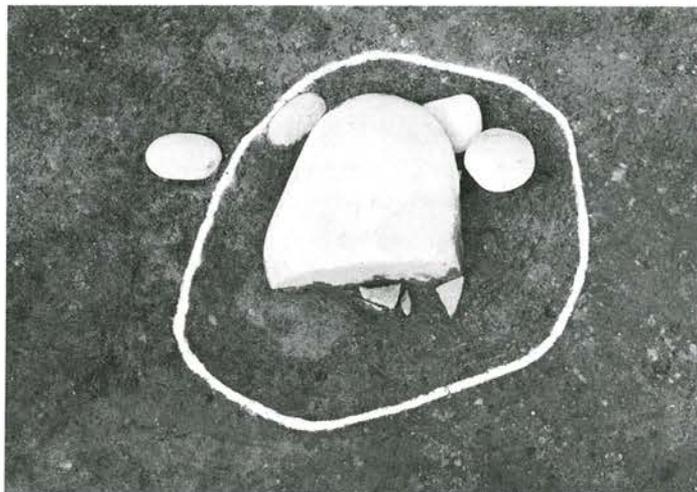
◀ 3. 礎石の上に据えられたⅢ期の礎石
(礎石No11)



▲ 1. 東西列の礎石(西より)

▼ 2. 東西列の礎石(東より)



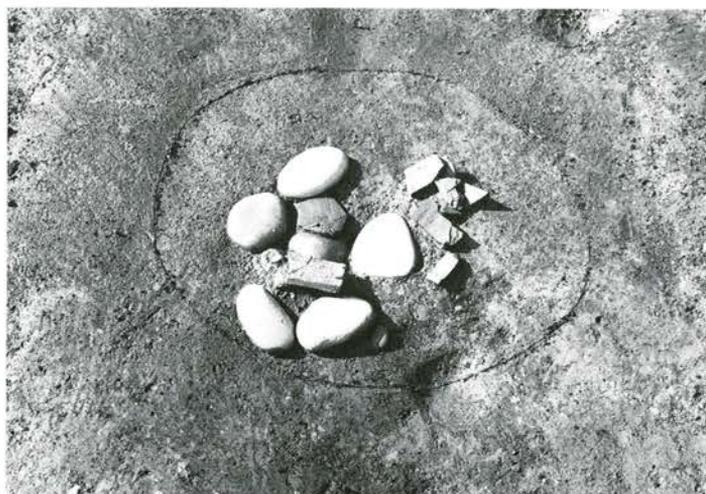


◀ 1. Ⅲ期礎石柱座に残る柱の印影
(No18)

▶ 2. Ⅱ期の掘立柱柱根(No17下)

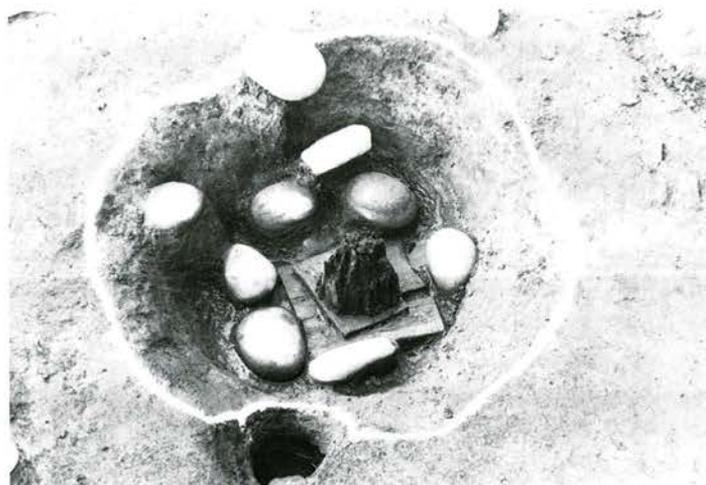


◀ 3. 炭化しているⅡ期掘立柱柱根(No18下)



◀ 1. Ⅲ期の根石と敷き込まれた瓦 (No19)

▶ 2. Ⅱ期掘立柱柱根と礎板 (No20下)



◀ 3. Ⅱ期の柱根周囲に残るⅠ期の礎石掘方と根石 (No20下)

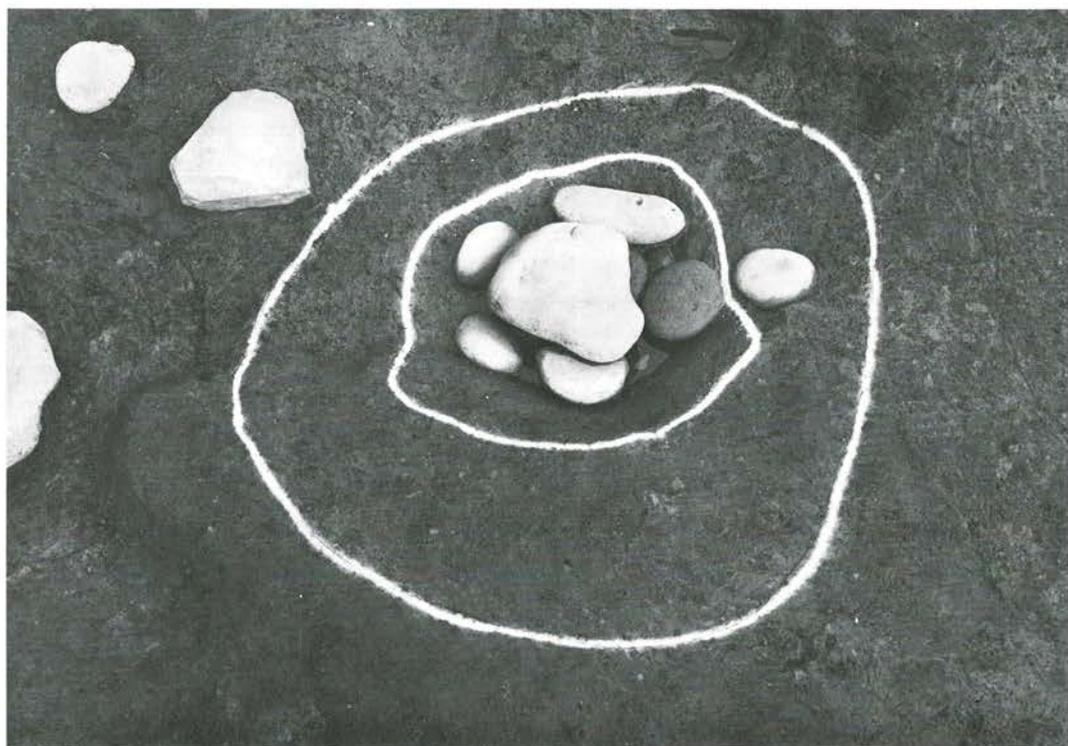


◀ 1. 中門(西より)

▶ 2. 中門に残るⅡ期掘立柱柱根
(No26)



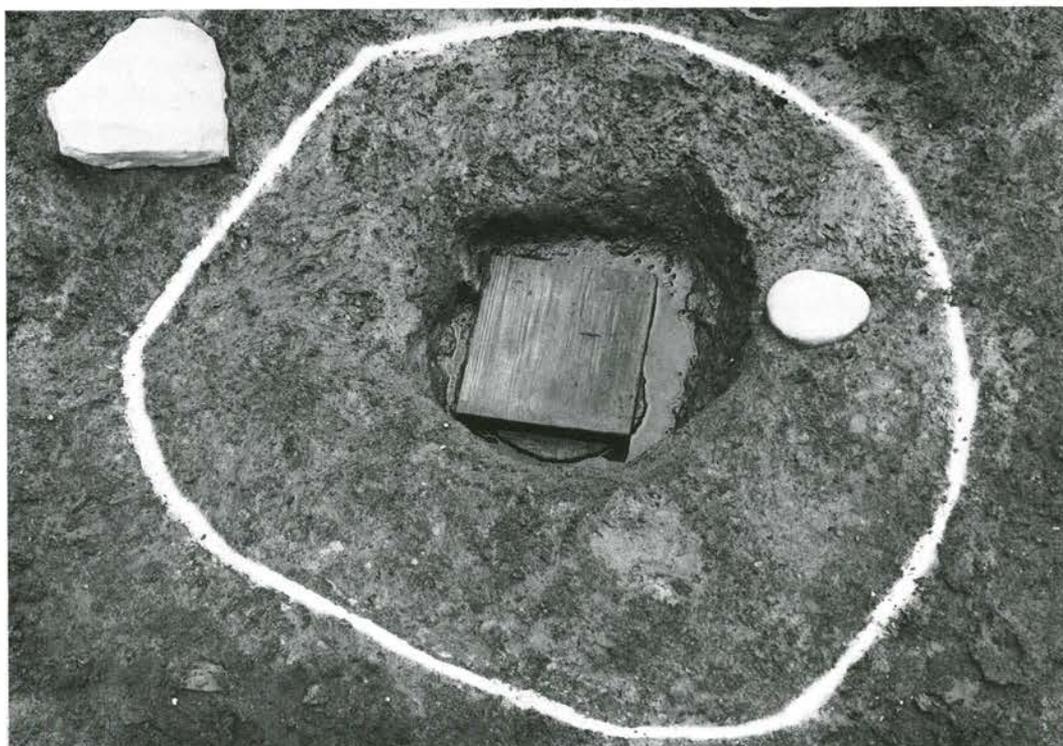
◀ 3. 中門に残るⅡ期掘立柱柱根
(No23)



▲ 1. 中門棟柱Ⅲ期礎石(No24)

▼ 2. 中門棟柱Ⅲ期根石狀況(No24)

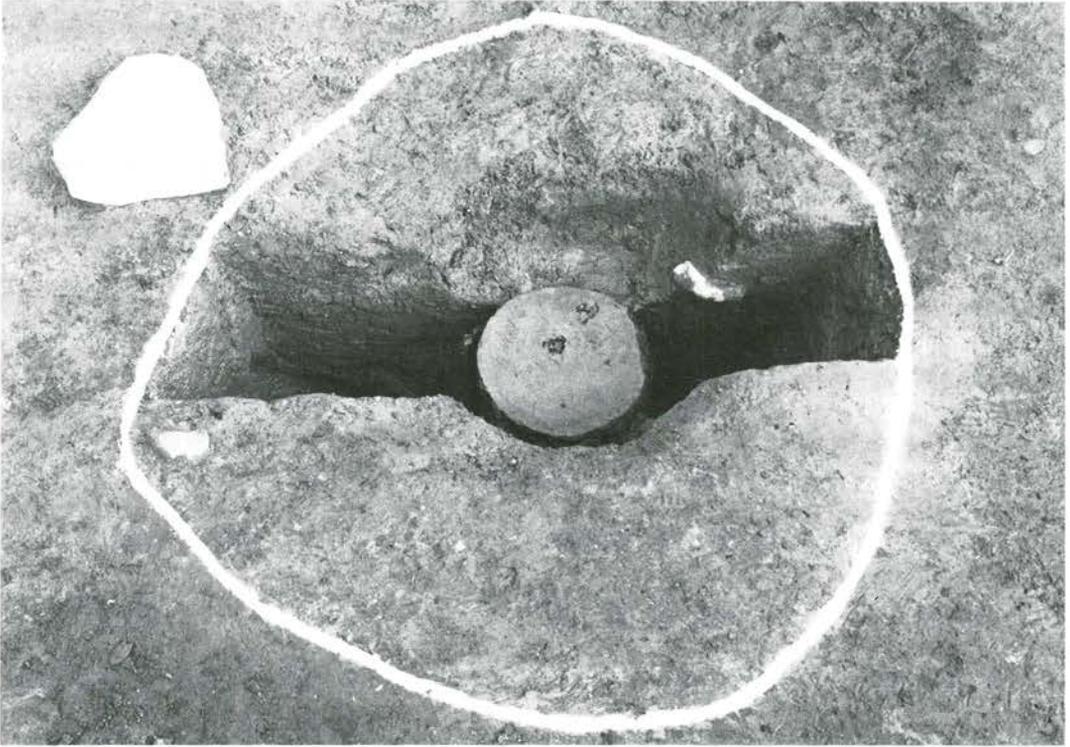




▲ 1. 中門棟柱Ⅱ期礎板(No24下)

▼ 2. 中門棟柱Ⅱ期礎板(No24下)





▲ 1. 中門棟柱 I 期掘立柱柱根(No24下)

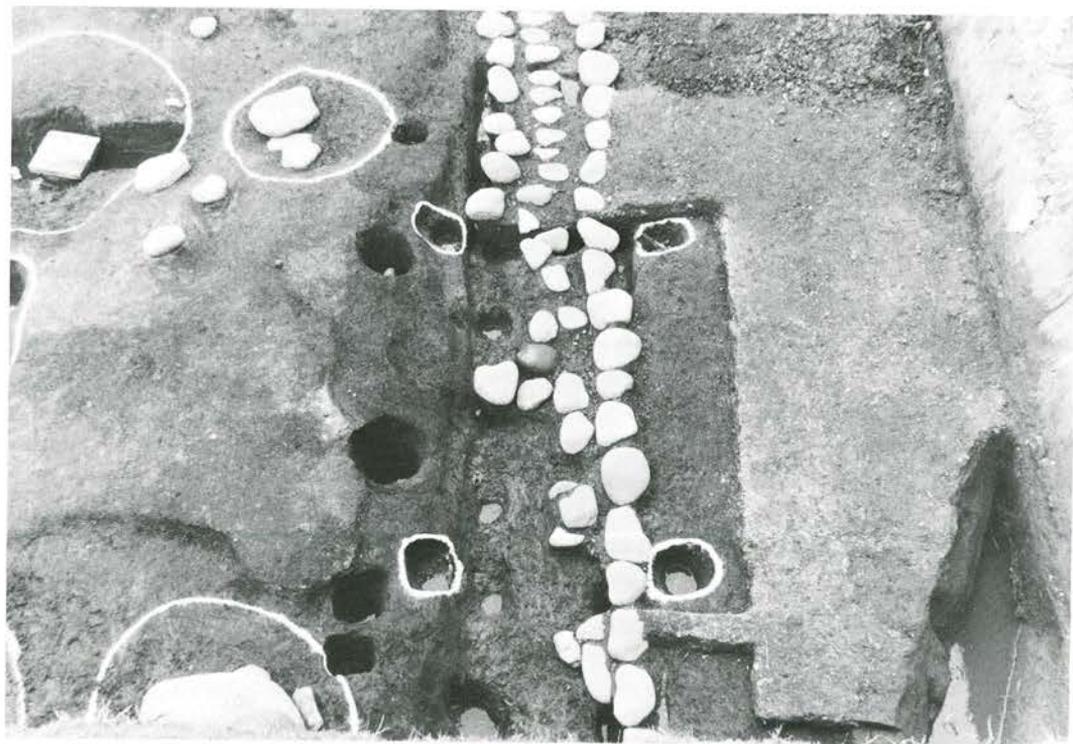


◀ 2. 柱根周囲に
貼られている樹皮



▲1. 中門と橋状遺構(北より)

▼2. 橋と雨落ち溝(東より)





◀ 1. 4 溝と土層断面

▶ 2. 橋、雨落ち溝北側の砂利面



◀ 3. 翼廊背後(西側)地山上砂と
貝ガラ面



◀ 1. 2溝と3溝(南より)

▼ 2. 3溝土層断面





◀ 1. 1溝(西より)

▶ 2. 1溝(北東より)



◀ 3. 升状遺構(南西より)



▲1. 柵状遺構(南より)



◀2. 柵状遺構焼けている柱根
(北より)



3 溝下層出土



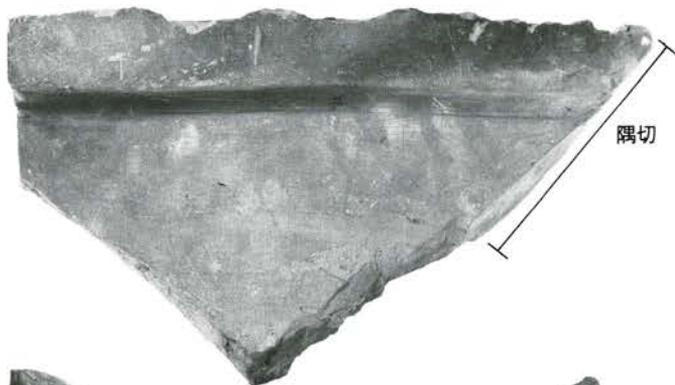
▲YA I 01



▲YA II 01

3 溝中層出土

鏡瓦



▲YN I 01

▲YN I 03



▲YN II 11



▲YN II 03



▲YN II 05



▲YN II 01

宇瓦



YAII03



YAII02



YAII05



▲YAII09



▲YAIII01 b



▲YAIII01 a



▲YNIII03



▲YNIII01



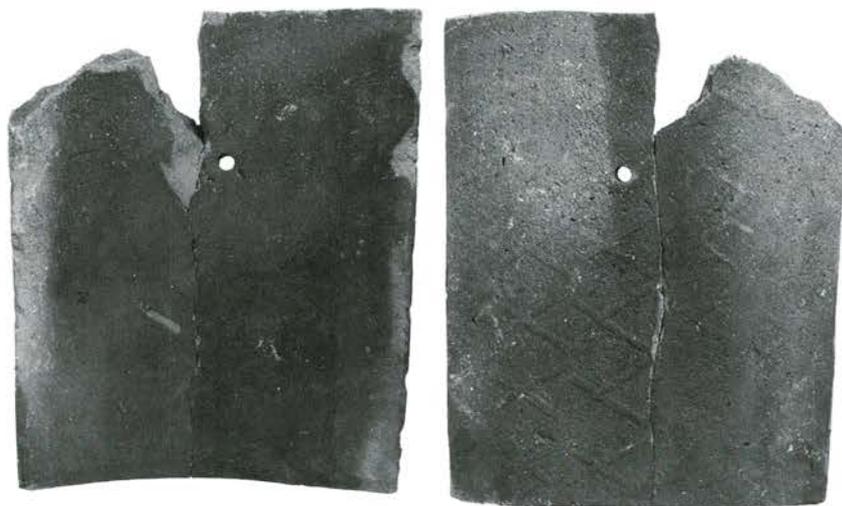
鐘瓦・宇瓦



▲男瓦A種

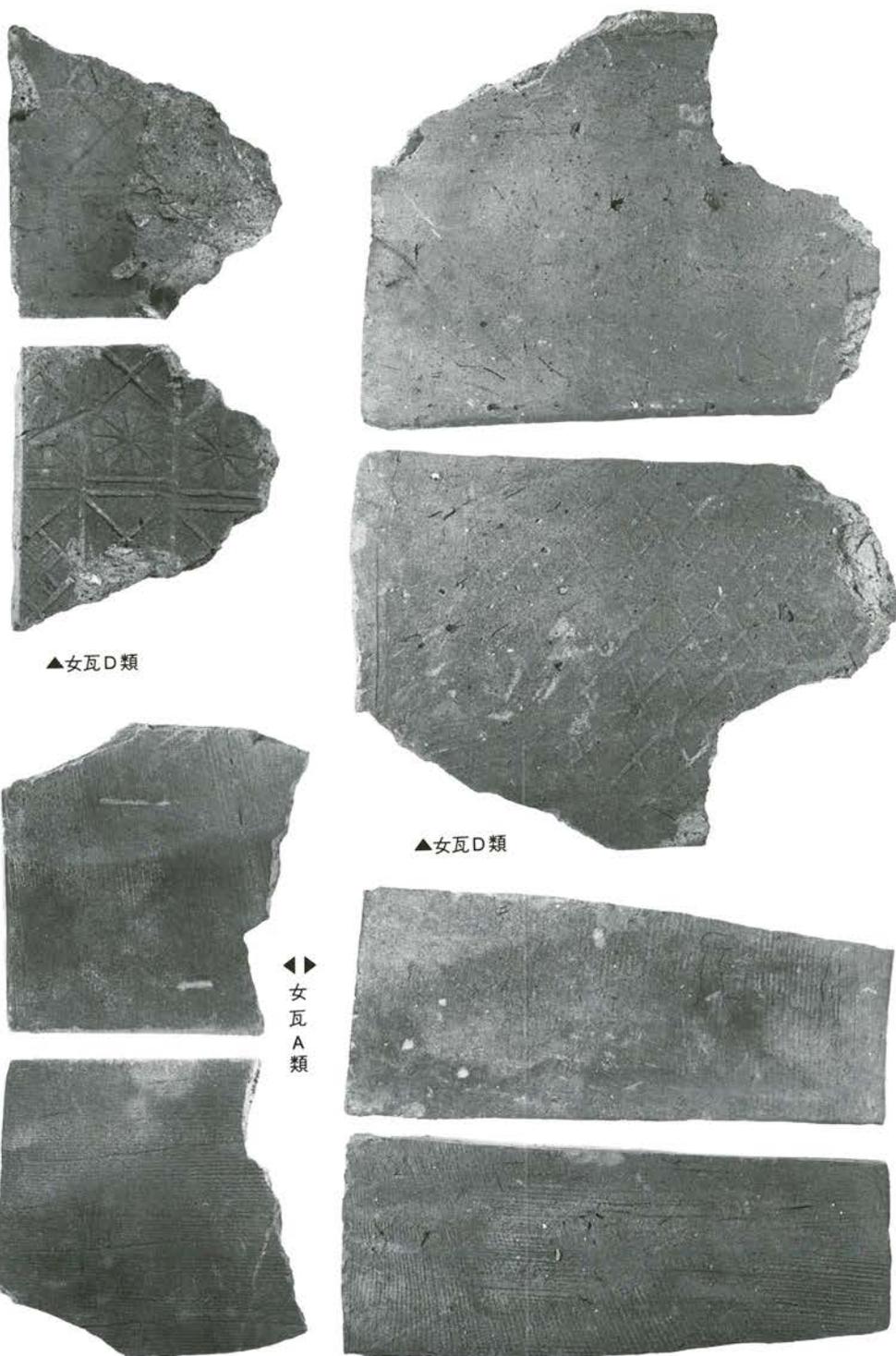


▲男瓦B種



▲女瓦C類

男瓦・女瓦

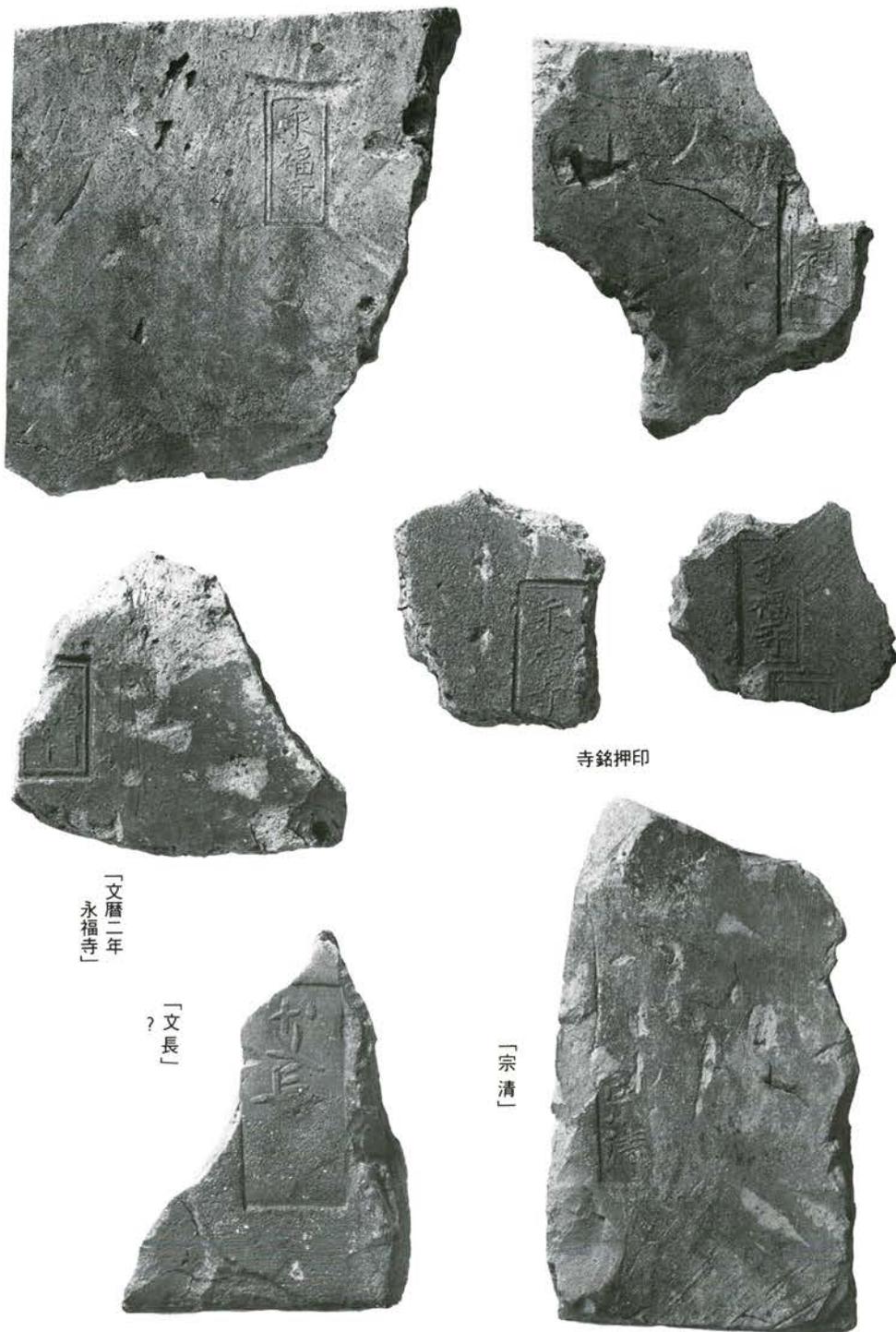


▲女瓦D類

▲女瓦D類

◀▶
女瓦
A類

女瓦



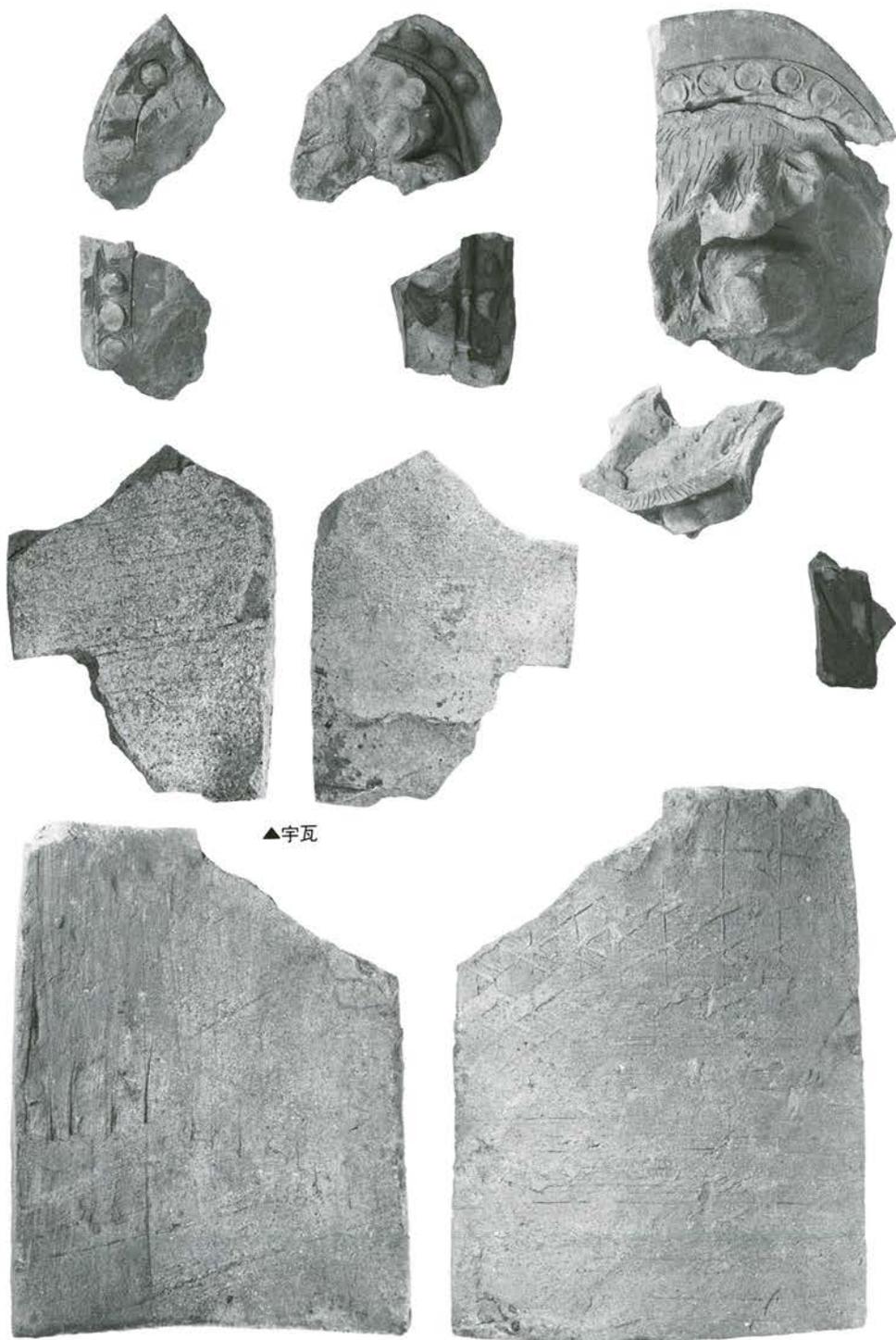
寺銘押印

〔文曆二年
永福寺〕

〔文長
?〕

〔宗清〕

文字瓦

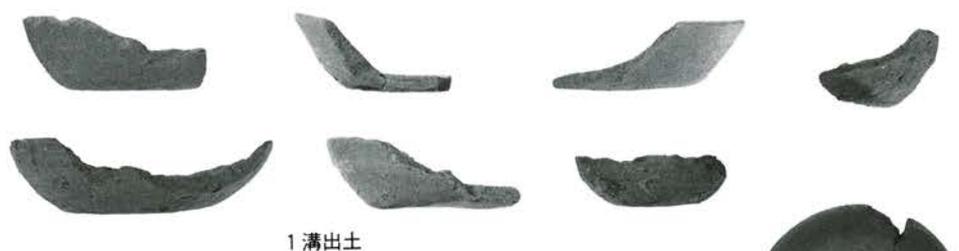


▲宇瓦

鬼瓦・東海窯系産瓦



東海窯系産瓦



遺構出土かわらけ



3 溝上面出土



地山・遺構面出土

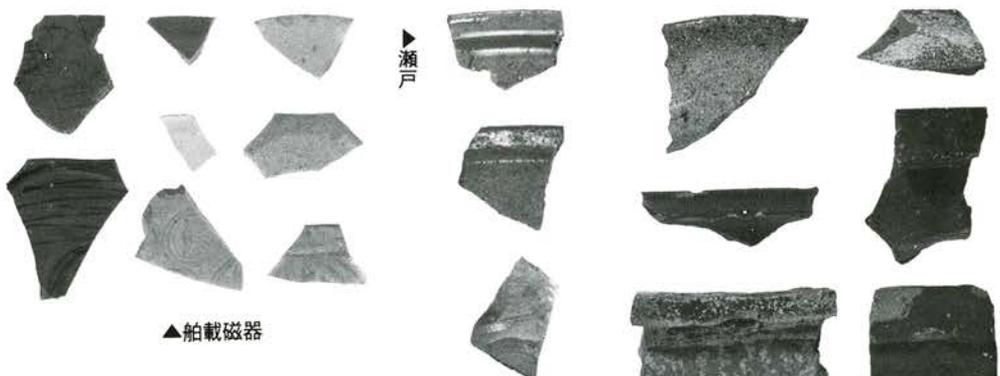


かわらけ溜り出土



雨落ち溝上層出土

遺構・遺構面出土かわらけ



▲船載磁器

▶瀬戸



▲手焙り

▲常滑

▲近世陶器



▲硯

▲銭

▼水輪



▲釘



◀空風輪

▼漆器



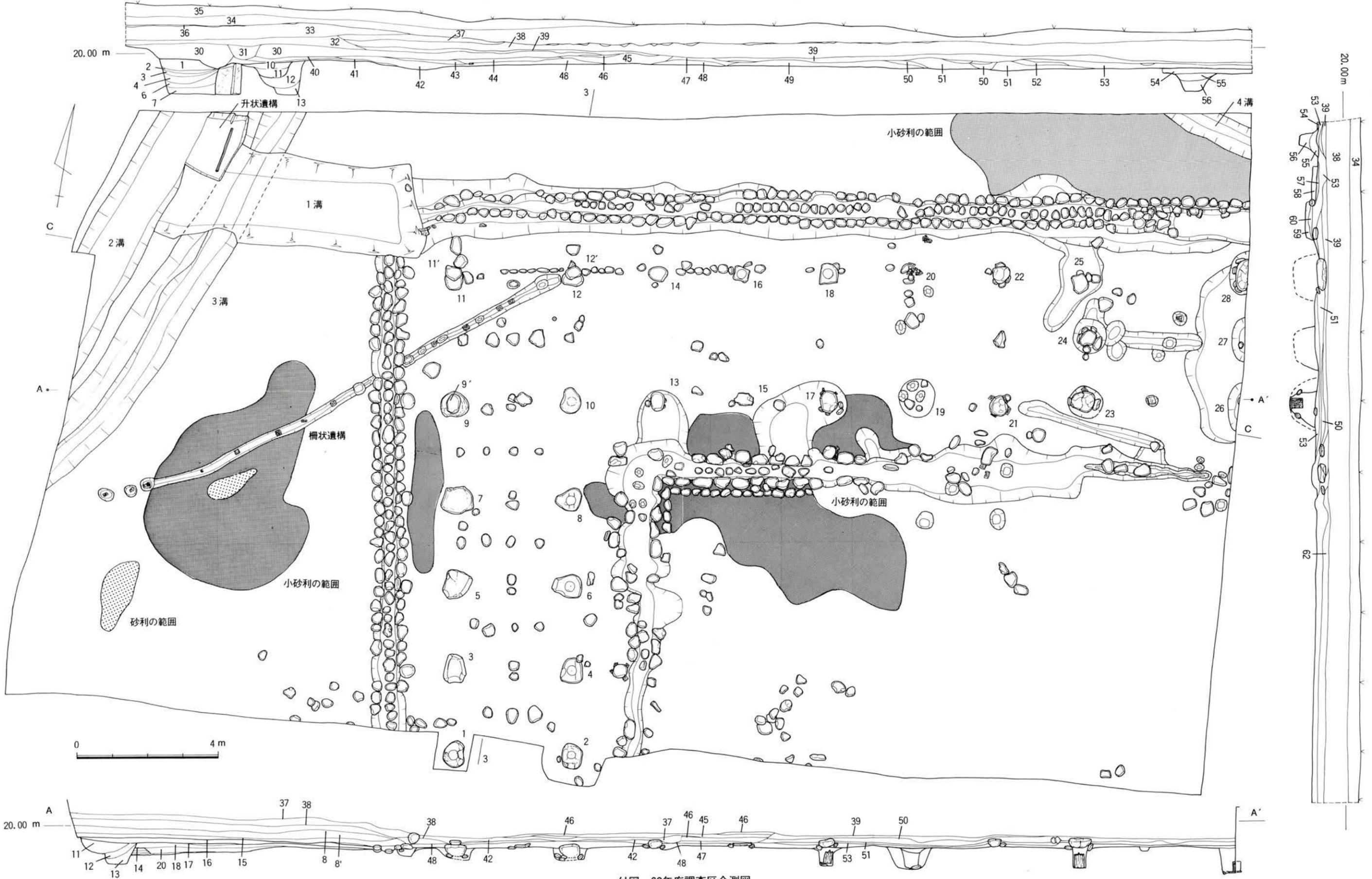
その他の遺物

鎌倉市二階堂
史跡永福寺跡
国指定史跡永福寺跡環境整備
事業に係る発掘調査概要報告書

—昭和62年度—

発行日	昭和63年3月
編集	鎌倉市教育委員会
発行	
印刷	(有)湘南コピーセンター

- | | | | | | | | |
|-----------------------|--------------------------|-------------------|---------------------|---------------------|---------------------|-------------------|-----------------|
| 1. 暗黒灰色砂質土 | 10. 暗青灰色砂泥(細かい土丹含む) | 17. 黒色土 | 34. 明茶灰色土(細かい土丹粒入る) | 41. 暗茶褐色土 | 48. 暗青灰色泥砂 | 55. 黒色土(土丹混り) | 62. 青灰色砂泥 |
| 2. 暗茶褐色粘質土 | 11. 青灰色粘質土(3溝上層) | 18. 黒色土 | 35. 茶褐色土(表I) | 42. 暗茶褐色土(土丹ブロック含む) | 49. 青灰色粘質土 | 56. 黒色土(木片多量に含む) | 63. 土丹層 |
| 3. 暗黒灰色砂質土(3cm大の土丹多量) | 12. 黒灰色砂質土(3溝中層) | 20. 黒色土(細かい貝ガラ含む) | 36. 宝永スコリア | 43. 黒色粘質土 | 50. 青灰色砂層 | 57. 暗青灰色粘質土 | 64. 土丹層(人頭大の土丹) |
| 4. 暗黒灰色砂質土(砂、木片多量) | 13. 黒色土(3溝下層) | 30. 暗茶褐色粘質土 | 37. 黄灰色土 | 44. 青灰色砂層(泥を含む) | 51. 青灰色粘質砂 | 58. 砂利と土丹層 | |
| 6. 暗黒灰色砂質土(拳大の土丹含む) | 14. 黒色粘質土と細かい土丹の版築 | 31. 明茶灰色土 | 38. 明茶灰色土 | 45. 青灰色粘質土 | 52. 鉄分の多い砂利層 | 59. 暗青灰色土 | |
| 7. 暗黒灰色砂質土(砂利多量) | 15. 青灰色砂質土(細かい貝ガラと上面に砂利) | 32. 茶灰色粘質土 | 39. 青灰色砂層(玉砂利、砂、砂泥) | 46. 青灰色砂質土 | 53. 青灰色砂層 | 60. 暗青灰色砂(砂、砂利多量) | |
| 8. 土丹層 | 8'. 土丹層(人頭大の土丹) | 16. 暗黒色土 | 33. 黄茶灰色土(砂が多い) | 40. 青灰色粘質土 | 54. 土丹と黒色土(上面に砂利多量) | 61. 青灰色砂質土 | |



付図 62年度調査区全測図